
花の名前

高嶺 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の名前

【Nコード】

N0301E

【作者名】

高嶺 蒼

【あらすじ】

帝国歌劇団花組の隊長・大神一郎は、ある日花組メンバーの一人、李紅蘭の発明品の実験台を頼まれる。その申し出を快く引き受け、実験台となった大神。しかし、お約束のように実験は大失敗…。その結果、大神はある場所へと飛ばされてしまう。そこで大神は一人の少女と出会う。

プロローグ（前書き）

この小説はゲーム「サクラ大戦」の二次小説です。「サクラ大戦」を知らなくても読めますが、知っているとなお面白いかもしれませ
ん（笑）

更新は話を分割しただけなので一度読んだ方はご注意を！！

プロローグ

プロローグ

今日、街角の小さな花屋で綺麗な白い花を見つけた。大輪の花を咲かせたそれは凜として美しく、俺の瞼に強く焼き付いた。

花のことにはどうも疎くて、その名前すら分からないけれどーいつかきつと、この花を君に送ろう。

そう遠くない未来。

この胸に秘めた思いを君に伝える勇気を持てたとき。

腕いっぱいはこの花を抱えて君の所へ行くよ。君の視界をその白で塗りつぶして、そして伝えよう。君が好きだと。

この世界の誰よりも、君を幸せにしてあげたいーそのためなら俺は、きつとなんだってできると思うから。

とりあえずは一輪。ささやかな思いを込めて。名前も知らない花だけど、君によく似たこの花を送ろう。

ほんの少しでも君に幸福が訪れるようにー

俺がこの花を差し出したら、マリア…君は微笑んでくれるだろうかー？

第1章〜1〜

第1章〜1〜

目を覚ますと、そこは見慣れた帝劇の俺の部屋ではなく、据えた匂いの立ちこめる薄暗い路地裏だった。

どこだろうー薄くもやのかかった頭で考えるが、答えはでてこない。ただ身動きしようとするとも体が酷く痛んだ。どうやらけがをしているようだった。

何か事故にでも遭ったのかなーそんなことを思う。そうして浮かび上がってきたのは実験好きな眼鏡の隊員、紅蘭のこと。彼女の顔を思い浮かべたとき、なぜ自分がこんな目にあっているのか、その経緯をはっきりと思い出していた。

その日、帝国歌劇団は久しぶりの休日だった。

空は晴れ渡り、絶好のお出かけ日和だったが、日頃の疲れもあり、帝国歌劇団花組隊長大神一郎は、ゆっくりと惰眠をむさぼることを決め込んでいた。のんびりとした、いい休日になるはずだった。そう、部屋に響く、あのノックの音が聞こえてくるまでは。

その音は唐突に、まどろむ大神の耳に飛び込んできた。夢の世界から無理矢理に呼び起こされた大神は、寝ぼけた声で突然の訪問者に答える。

「…誰だい？」

眠かった。できることならこのまま再び眠りの中に戻ってしまいたかったが、そう言うわけにも行かない。もしかしたら隊員の誰かが何か相談事に来たのかも知れないしー隊長としての責任感を奮い立たせて大神はくつついて離れようとしないうちに瞼を無理矢理にこじ開けた。

「大神はん？ちよつとええやるか？」

突然の訪問者は紅蘭だった。いいかと問われれば、気のいい大神のこと、否と答えられようはずもない。嫌な予感がしなかったと言えは嘘になる。今までも何度も今回と同じように呼ばれて彼女の発明品の実験台になってきたのだ。爆発に巻き込まれ、死にそうな思いをしたことも数え切れないほどだ。はつきり言っただけ彼女につきあうことは恐ろしい。恐ろしいーが、だからといってむげに断つてしまふこともできない。もしかして今日こそは、何か真剣な悩みあつての訪問かも知れないではないか。そう思っただけ人のいい大神はベツドを離れたがらない自らの体を叱りつけて起きあがる。そしてそのままドアの方へと向かった。

ドアを開けるとそこにはにこにこ朝から元気な紅蘭の笑顔。それはどう見ても悩みを抱えた人間の表情ではなかった。半ば予想していたその状況に、やっぱりなー大神は小さく肩を落とし、力無い笑いをその顔に浮かべた。

「いやー、良かったわ。大神はんがいてくれて」

心底嬉しそうな声。その声を聞きながら、大神は無精せずにとこかへ出かけていれば良かったと、心の底から悔いていた。だがその後悔ももう遅い。すでに大神は捕らわれてしまったのだから。

「…新しい発明品かい？」

観念してそう尋ねた。もう答えの分かり切った質問ではあつたが。

「さすがは大神はんや。よう分かつてるやないの」

ーほめられても余り嬉しくない。

思いはするもののそれを出す勇氣もなく、ただ曖昧に微笑んだ。もちろん紅蘭がそんな大神に気付くはずもなく、眼鏡の奥の瞳を輝かせて言葉を続ける。

「今回の発明はすごいで。世紀の大発明ちゅうやつやな。今度ばかりは大神はんもびっくり仰天間違いなしや」

紅蘭の発明にはいつだってびっくり仰天だよーこころの中だけでそうつぶやく。うんざりした思いがないでもなかったが、それでもまあいいかと思えるのは、きらきら光る紅蘭の目のその奥にある真

剣な輝きを知っているからだろうと思う。

そう、彼女はいつだって真っ直ぐだ。彼女の発明はどんな時でも誰かのために考えられたもの。人々に幸せをーそんな思いが根底にある発明品だからこそ、大神も実験につきあうことを嫌だと言うことはできない。それに大神の犠牲もあながち無駄というわけではないのだ。一度犯した失敗を、紅蘭が再び繰り返すことはない。失敗を繰り返し繰り返し、彼女は自らの発明品をより完成されたものへと近づけていく。

そのことを知っているからこそ、大神は痛い目を見つつも紅蘭の実験につきあい続ける。逃げ出したいと思うこともときにはあるが、それでも自分のささやかな犠牲が少しでも彼女の発明の役に立つならそれでいいではないかーそんなふうに思いながら。

先に立って歩き出した紅蘭の後を追うように大神もまた歩き出す。いつもであれば真っ直ぐ紅蘭の私室へ行くのだが、今回に限り、彼女は自分の部屋へ向かわずに、階段を下りて舞台の方へと歩いていく。不思議に思って尋ねると、今回の発明品は大きなものなので部屋にはおけず、舞台上に置いてあるとのことだった。昨日のうちに部品を運び、徹夜で組み上げたのだと、紅蘭は言う。言われてみると眼鏡の奥の目が心なしか赤い。連日の舞台で疲れているはずなのに、なんだか心配になって、大神はその表情を曇らせた。

こんなふうに紅蘭は時々無茶をする。一つのことには夢中になるととたんに周りのことが見えなくなってしまうのだ。そう言う性格だから仕方がないと言ってしまえばそれまでだが、たまにはそれを近くで見ている人間のことも考えて欲しいと思う。余計なお世話かも知れないが、それでも心配せずにはいられない。彼女は大切な仲間なのだから。

第1章 2

第1章 2

舞台に着くとその中央になんとか不審な大きな物体が置いてあった。一見、それは人一人やっと入れるくらいの木の箱にしか見えないうーと言っか、一見も何も、見たとおり巨大な木箱そのものである。俺にあれをどうしろと……？

ほんの一瞬、絶句して言葉もでない大神。

そんな大神の様子に気付き、紅蘭は頭一つは上にある彼の顔を仰ぐ。

「どないしたん？大神はん」

そんなふうに見ね、それに対する大神の答えも待たずに、独り合点をした紅蘭は、ハーンとその眼鏡を鋭く光らせた。

「さては大神はん、驚いて声もでないんやな？」

まあ、確かにその通りではあるのだが、今の大神自身の現状と紅蘭の考えている状況の間にはかなりの隔たりがあるような気がする。のは気のせいだろうか……？

大神は首をひねり、考えた。が、その疑問に答えをくれる第三者がここに存在するわけもなくー結果大神は紅蘭の多大なる誤解を正すこともできずただ沈黙する。その間にも紅蘭は大神から離れて箱のすぐ脇で誇らしそうに胸を張り、隠しきれない笑みを刻んだ口元から漏れるのは、

「ふっふっふっ」

とそんな妖しすぎるくらい妖しい含み笑い。

「まあ、その気持ちもわからんでもないけどな。これこそ李紅蘭、今世紀最大の大発明！」

そんな前振りを聞かされてしまえば、嫌でもその装置に対する興

味が高まってくる。もちろん不安なことに変わりはないが、それでも何となく身を乗り出して紅蘭の次の言葉を待ってしまう。

「その名もー」

「そ、その名も…?」

「ごくりとつばを飲み込んだ。」

その不安と期待が入り交じった思いが最高潮に達したとき、満を決して声も高らかにそ紅蘭がその名前を告げる。その名もー

「うっかり逆行君一号やー!!」

「う、うっかり…?」

それ以外の、言葉がでなかった。期待していた分だけ大神の落胆は大きい。もう、地の底まで一気に沈み込むほどの勢いだ。

「紅蘭、君はそんなうっかりしたような装置を俺で実験するつもりなのか…?」

うっかりーうっかりと言えはあれだろう。花組のみんなが俺に向かってよく使うあの言葉だ。ついうっかり間違えてーとか、ついうっかり失敗してーとか、ついうっかり爆発……考えるだけでも恐ろしい。

そう言えばついこの間もさくら君の口からその言葉を聞いたようなー大神は遠い目をして、その時のことを思い返した。

その日は MARIA が夕食を担当すると言うことで、一人では大変だろうから少しでも手伝いになればと大神も厨房へ向かった。別に他意はない。それが他の誰であったとしても、大神は手伝いを申し出たであろうし、本当にただの親切心からでた行為だったということにははっきりと言っておきたい。

厨房についた大神は、そこに MARIA がいることを疑いもせず、軽やかにその中へと足を踏み入れた。

「MARIA、何か手伝うことあるかい?」

にこやかにそう言った大神が感じたのは紛れもない殺気。はっとした大神が身構える間もなく、その頬をかすめて何かが後ろの壁に

突き立った。それは一本の研ぎ澄まされた包丁。ぎこちない動きでそれが飛んできた方を見る。そこにはに妙に凄みのある笑みを浮かべたさくらがいた。

「さ、さくら、君？」

うわずつた声で彼女の名を呼ぶ。

「マリアさんなら、今、いませんけど？」

と、彼女はごく自然に、につこりと可愛らしく笑って言った。が、その目はちつとも笑っていない。

「そ、そうか。で、そ、その、あの…。」

「なにか？」

またまたにつこり。笑っているのに怖い…。大神は壁に刺さったままの包丁を指さし、おそろおそろ尋ねた。答えを聞くのが、恐ろしいような気はしたが。

「…これ、は？」

「ああ、それですか？いやだわ。私ったら、つい、うっかりー」

「つ、つい、うっかり…？」

「はい。つい、うっかり、手を滑らせてしまって…。ごめんなさい、怖かったですよね？もちろん、大神さんをねらった訳じゃないんですよ？もう、本当に、うっかり手からすっぽ抜けちゃって…ほら、私ったらドジだから。うふふ」

「はは、ははははは…」

一見、まるで邪気の無いように見えるさくらの笑顔を見ながら、大神もまた引きつった笑顔で乾いた笑い声をあげる。

彼女が怖かった。それはもう、今すぐ回れ右をして逃げ出してしまいたいくらいに。だが、大神にも隊長としての意地がある。仮にも部下である（しかも女性の）一隊員に怯えて逃げ出すことなど出来ようはずもない。

「うっかりとばした包丁が、果たしてあんなに的確に飛んでくるものだろうか？」

大神は思う。だが思いはしたものの、それを口に出して彼女に質

すつもりにはなれなかった。なぜだかとても恐ろしい答えが返ってきそうなりそんな嫌な予感がしたから。もちろん、ただの直感にすぎなかったが。野生の本能と言うべきか、こういつときの直感はやけに良く当たるものなのだ。

大神は怯え混じりの眼差しをさくらの顔に向ける。その視線を受けたさくらはにっこりと見事なまでの笑顔で大神の、そんな眼差しを退けた。

その完璧な笑顔の奥に、大神は女性というものの奥深さというかなんというか、恐ろしさを、かいま見たような、そんな思いがした。

「女心は難しいなあ、大神い」

そんな親友の声が、どこからともなく聞こえた気がして、大神は疲れ切ったようなうつろな笑みをその面に浮かべたのだった。

第1章 3

第1章 3

今度こそ、死ぬかも知れないーどこまでも真剣に大神は思った。
何しろ今度の相手は紅蘭なのだ。紅蘭と言えば爆発。包丁どころ
の騒ぎではない。

ー長いようで短い人生だった

魂が抜けたような表情で大神は思う。そうして再び視線を遠くに
さまよわせる大神を、現実へと引き戻したのは紅蘭の声。

「甘いっ。甘いで、大神はん」

「甘いって…何が？」

思わず問い返してしまう大神。何を分かり切ったことをとあきれ
顔の紅蘭は、大神の予想を遥かにこえた答えを返してきたのだった。

「何て、そら、つつこみに決まってるやろ？」

つつこみ？ー大神の思考が一瞬停止する。固まってしまった大神
を尻目に紅蘭は拳を振り上げ力説する。

「ぼけと言ったらつつこみ。これはもう常識やで、大神はん！！」

ーそう、なのかな？

紅蘭の言葉のあまりの力強さに、首を傾げつつも納得してしまう
大神。

「うちが可愛い発明品にすっかり君なんて名前つけるはずないや
ろ？あかなあ。うちの性格知ってればそのくらい分かりそうなも
んや」

そう言われてみればそんな気がしないでもない。ただでさえ実験
相手には事欠いているのだ。それなのにせっかくの力モーもとい貴
重な実験台に恐怖心を与えるような名前では、誰も彼女につきあい
はしないであろう。以外にと言うか、計算高い一面を備える紅蘭の

ことだ。彼女がそんな無用の危険を冒すはずがない。いかにも成功しそうな名前で安心させておいて、時間差のフェイントで大爆発を起こすーそれがいつもの、大神も知り尽くした紅蘭のパターンだったはずである。

そこまで考えて大神はかすかな苦笑をその口元に浮かべた。よくよく考えてみればそれは、普段であれば笑い飛ばせる、そんなレベルの冗談だった。よほど余裕がなかったのか、動揺していたのかーあるいは先日のさくらの一件が予想以上に根深く大神の心に残っていたのかも知れない。それもまあ、仕方ないだろう。先日のさくらの一件は、大神のそれまでの女性観を根底から覆すような、それだけのインパクトのある出来事だった。

「まったく、うちがせっかく初心者の大神はんのためにつて分かりやすいぼけかましたつてのに、つつこみの一つもできへんなんでこれはもう犯罪的やで？」

大きなため息をつく紅蘭に、大神は訳もなく自分が何か悪いことをしてしまったような思いに駆られる。

「ごめん、と頭を下げた大神に、しゃあないなあーと紅蘭が笑った。優しい目で大神を見つめ、そんなところも大神はらしいわーそう言う紅蘭に、大神の顔にもまた笑みが浮かぶ。

そんな大神の笑い顔を見て紅蘭はほんの少しだけその頬を赤らめた。が、気を取り直すように小さく一つ咳払いをした後、

「せやけどなあ、大神はん。一つだけ忠告しておくから、よく覚えとき」

「？」

「鋭く的確で、なおかつ笑いのとれるつつこみーこれができへんようじゃ、立派な隊長には到底なれへんで？」

真面目な口調でそう言った。

それが真実なのか、はたまた紅蘭のたちの悪い冗談なのかー判断できずに大神は考え込んでしまう。

普通の軍人であれば、そんな馬鹿な話があるかと、一蹴してしま
うであろうことを、もしかしたらそんな基準もあるのかもと思うと
ころが大神という青年のお人好しなところだ。そう言う部分を周囲
の人からこよなく愛されている大神青年は、一つ領き心を決める。
嘘と言いつけられないのであれば、信じるほかない、と。そして決心
する。明日からは日頃の鍛錬に加え、つつこみの練習もそのメニ
ューに加えること。もちろん恥ずかしいから、人に見られないように
こっそりと、だが。

そつと拳を握り、大神は思う。これは花組のみんなにふさわしい
隊長になるための試練なのだ、と。

そんな大神は誰の目から見ても、真面目で素直な、なおかつ上に
馬鹿が付くほどのお人好しだった…

その中を覗くとそこには椅子が一つ備え付けてあった。

「これに座ればいいのか？」

多分そうなのだろうーというかそれ以外に椅子のある理由も見あ
たらないので、大神は、うっかり逆行君改めどつきり逆行君一号の
中に入り、その椅子に腰掛けた。と、そこへ、外で作業している紅
蘭の声。

「座つたらベルト締めといてな。移動中揺れるやろつから」

これは移動するものなのかーそんなことを考えつつ、大神は言わ
れたとおり、椅子からのびているベルトで体をしっかり固定する。
移動するにしては、車輪とか付いていなかったけど、と、首を傾げ
ながら。

「移動するってどうやって？車輪は付いてないみたいだけど」

入り口を締めに来た紅蘭に、そのことを尋ねてみる。紅蘭はびつ
くりしたような顔をして大神を見た。

「ありや。まだ言つとらんかった？」

頷く大神。

「そら、申し訳ないことしたわ。なんや、もうすっかり伝えたよ

うな気になってたんやなー」

苦笑いをして、それから大神にこの装置の説明をしてくれた。それは実に驚くべき内容で、この実験が成功し、装置が完成品となれば、まさに世紀の大発明と呼ばれるようなものになると大神に実感させた。

「これはな、場所を移動するためのもんやないねん」

場所を移動するものでないのなら、いったいどこを移動するというのかー疑問に思った大神は素直にそれを紅蘭にぶつける。元々そのことについてちゃんと説明するつもりであったのであろう紅蘭は、一つ頷き、その言葉を告げた。

「時間や。この装置は、時間をさかのぼって過去に行くためのものなんや」

「過去？」

「せや。ごつつい発明品やろ？」

「ああ、ほんと、すごいな」

得意げに笑う紅蘭に、大神もまた感嘆の言葉を惜しまない。素直な賞賛を浮かべた黒い瞳に見つめられ、紅蘭は照れくさそうにその頬を紅く染めた。

「それで？俺はどこに行くんだい？どの時代？」

「ん〜。予定としては降魔戦争の頃がええかなって思っとるんやけどー。あ、そろそろ戸、閉めるで？」

返事も待たずに扉は閉められ、その狭い空間は暗闇に閉ざされた。降魔戦争ーその言葉を聞いて大神は懐かしい人を思い出す。いや、思い出すというのは正確さに欠けるだろう。その人はいつだって、大神の心の中にいるのだから。

大神は懐かしくーそして少しだけ切なく、その人を思う。

藤枝あやめ。大神が誰よりも深く、深く愛した人。

降魔戦争の時代には、彼女は生きて、まだこの世界にいるはず。

大神と出会ってもいない、そんな青年がいることすら知らない彼女ではあるが。

彼女を失い、もう随分時はたった。すっかり吹っ切れたと思っていたが、それでもやはり心は騒ぐ。彼女のことを思うーただそれだけのことで。

「大神はん、動かすで？」

そんな紅蘭の声に、大神は追憶の中から引き戻される。大神は大きな声で答えた。

「ああ。いいよ」

低い稼働音が響く。装置が動き出したのだ。大神は目を閉じ、椅子にもたれた。今更何を心配しても仕方がない。もう逃げようもないのだから。今はただ、心静かに待つのみだ。成功か、失敗かーその結果が分かる時を。

「大神はん？」

紅蘭の声に大神は目を開けた。とはいえ目を開けようと開けまいと、暗闇の中では余り意味がないかも知れないが。

「なんだい？」

「もうすぐ出発やけど、その前に過去に行くにあたって注意することを教えとこ思つてな」

その注意事項は三つあった。

一つー過去の自分とはなるべく関わり合いにならないこと。

二つー過去の人に未来のことを告げてはいけないと言つこと。

そして三つー名前を告げるときは極力注意すること。覚えやすい名前を使うことはさけるようにする。特に未来であつ可能性のある人に対しては。これは無用の混乱を避けるためと、紅蘭はそう言っていた。

どんな偽名を使おうかーそう尋ねると、紅蘭はあっさりと、一郎でいいだろうと答えた。その提案に大神も頷く。それは日本でよくある名前だし、それに使い慣れない名前では逆にぼろが出る可能性もあるだろうから。

過去の世界にはおおよそ五日間ほどの滞在になるだろうと紅蘭は言った。五日間も劇場を離れて平気なのかと不安になったが、紅蘭

が言うには、向こうで五日たっても、こちらでは一分か、長くて五分ほどの時間でしかないらしい。不思議に思い紅蘭に説明を求め、その解説に耳を傾けていた大神は不意に自分の周囲の異変に気がついた。

それは煙だった。どこからともなく漏れ出た白煙が、大神の周りに立ちこめている。

「紅蘭！煙が！！」

叫ぶと、外から紅蘭の焦ったような声が聞こえた。

「あかん。こら、やばいで。大神はん、逃げて！早う！！」

「分かった。俺もすぐ行くから。君は先に離れてるんだ！」

そう言っただち上がるうとした大神は、自らの腰をしっかり固定したベルトに気付いて

舌打ちをした。手を伸ばし、はずそうとするが、これがなかなかはずれてくれない。気ばかりが焦って、手は全く言うことを聞かなかった。

「大神はん、急いで！！」

外から聞こえる紅蘭の悲鳴のような叫び声。

分かっている！心の中で答えるものの、作業はいつこうに進まない。大神の額を冷たい汗が流れた。

「っ！！あかん。爆発する！大神はん！！」

そんな紅蘭の声とほぼ同時に、それはおきた。

白く塗りつぶされた視界。爆音は聞こえなかった。ただ、体を襲う焼け付くような痛み、大神は自分が間に合わなかったことを理解した。

一瞬の浮遊感―遠くで響く紅蘭の声を聞きながら、大神は静かにその意識を手放したのだった。

第1章 4

第1章 4

― そうだった。俺は爆発に巻き込まれて…

大神はぼんやりと自分が置かれた状況を理解しはじめていた。だが、けがのためか、シヨツクのためか、ゆっくりとしか物事を考えることができない。そのことが酷くもどかしかった。

紅蘭は大丈夫だろうか、と、思う。自分がこうしてけがを負っていくらいだ。彼女が無事であると言い切ることはできない。もちろんこのけがには、自分がより爆心に近かったこともあるのだろうが、それでも彼女の元気な姿を見るまでは安心できそうもなかった。

我ながら心配性だとは思いつけれど、大神はかすかな微笑を浮かべ、それからゆっくりと首を巡らせて辺りの様子を見た。ただそれだけの動作なのに、体中が悲鳴を上げる。顔をしかめ、大神はそれ以上の行動を諦めた。

早く劇場に戻らなければ、と、気がかりが焦る。そんな中で大神はふと思う。果たして自分は劇場へ戻ることができるのだろうか？

と。

大神がそう考えたのは決してけがのことだけが理由ではなかった。大きな理由の一つは、なぜ自分がこんな所にいるのかと言うこと。ついさつきまで、自分は確かに大帝国劇場の中にいたのだ。それなのに今はこんな、まるで見覚えのない場所へ、一人放り出されている。大神の知る限りでは、劇場の近くにこんな場所はなかったように思う。もちろん見落としていることも考えられるだろうが、大神は自分の記憶が確かなものであることになぜか確信を抱いていた。

たぶんここは劇場の近くではないだろう。それどころか帝都ですらないかも知れない。

ほぼ仰向けに倒れているせいか、自然と目に入ってくる曇り空は、いつも見上げる帝都の空とは少し違っているような気がしたし、通りが近いせいだろうか？かすかに聞こえるざわめきに混じる人の言葉は、聞き慣れない、異国の響きを伝えてくる。

どこの国かは分からないが、たぶんここは日本ではない。それにもしかしたらここは過去の世界かも知れないのだ。

もう笑うほかなかった。こみ上げる衝動のままに大神は小さな笑い声をあげた。自分の置かれた状況があまりに途方もなくて―それに今の大神には、それ以外のことをするだけの体力も気力もまるで残っていないかった。

しばらくそうして笑った後―大神は今度は力つきたようにぐったりと目を閉じた。体が重くて仕方がない。手も足も、まるで自分のものではないかのように言うことを聞いてくれなかった。

諦め混じりの吐息を漏らし、体中の力を抜いた。少しだけ眠ろう―大神は目を閉じたままで思う。と言うか、今の大神にはそれ以外のことをするだけの体力も気力ももうすでに残ってはいなかった。

現状に関する不安は尽きない。だが、今はそれを考えることも億劫だった。

現在の望みは一つ。何も考えずに眠りたい―ただそれだけだ。それ以外望むことは何もなかった。

急速に訪れる睡魔の影。それに抵抗するだけの余力すらなく、大神はその甘美な誘惑に黙って身を任せただった。

第2章 1

第2章 1

薄暗いバーの片隅で、彼女は一人静かにグラスを傾けていた。美しい少女だった。

彫りの深い、整った顔立ち。艶やかな紅い唇。誰もが目を引かれるであろう美貌の少女は、だがしかし、見事なまでにその存在感を感じさせない。彼女は壁際の闇に紛れるように、ひっそりとそこに存在していた。ただ時折、鮮やかな金髪の下から覗く緑の双眸で、鋭く店内を見渡しながら。

騒ぎが起こると、彼女はその瞳をそちらに向ける。どんなに酔って凶暴になった男でも、彼女と目を合わせると誰もが皆一様にその動きを止めた。まるで頭から冷水を浴びせかけられたかのように。彼女の瞳は凍れる刃だ。その眼差しに貫かれ、それでも平常心を保てるものなど滅多にいない。

だが、たとえばもし、その洗礼に耐え抜き、抵抗するような命知らずな強者が居たとしよう。その者は望む、望まざるに関わらず、さらなる恐怖をその身に受けることとなる。彼女は自分に抗する者への容赦など、全くと言っていいほど持ち合わせてはいないのだから。

向かってくる者にたいして、彼女はなんの躊躇もなく、自分の持つ武力を行使する。

エンフィールド改。彼女の手によって様々な改造がなされたその銃は、彼女の意志のままに力をふるう。その銃口から飛び出す銃弾に耳をそがれて逃げ出す者も、決して少ない数ではなかった。

しかし、ここ最近ではそんな輩もだいぶその数を減らしていた。彼女がこの辺りで用心棒まがいの仕事を始めてからもう一月にも

なる。彼女という存在への畏怖心が浸透するには十分な時間だった。だから彼女は今日も静かにグラスを傾ける。一時間でも二時間でも、顔色一つ変えることなく。彼女が他にすることと言えば、その冴えた眼差しを時折思い出したように店内へと向ける、そのことのみ。

だが、そんな彼女にたいして、店の持ち主たちが異論を唱えることはない。ただそうしてそこにいることだけで、彼女は酔い路れ男たちへの十分な抑止力となっているのだから、文句の出ようはずもないのだ。

彼女を知る酒飲みは、決して薄れることのない畏怖を込めて彼女を呼ぶ。

凍れる眼差しを持つ者。氷の女神―と。

第2章 2

第2章 2

裏口の方で何か物音が聞こえたような気がした。それは普通であれば聞き逃してしまうほどの、そんなかすかな音だ。だが、彼女は敏感にそれを察知し、判断を仰ぐようにカウンターの向こうにいるマスターに視線を向けた。

彼もまたその音に気付いていたようで、彼女に向かって素早いうなずきを一つ返す。それは、彼女に対するGOサインだ。彼女は即座に行動を開始した。

音もなく立ち上がり、滑るような足取りで裏口へと向かう。まあ、行って確かめたところで、大した事実が分かるわけでもないだろうが。たぶん、野良猫がゴミをあさるうちに、その山を崩してしまっただけ。そんなところだろう。

だが、用心に越したことはない。用心を怠り、慢心した先にあるもの―それはさけられようのない死。この世界では、ほんの少しの油断が死を招く。死にたくないのなら―この世界でのし上がっていきたいのであれば、注意深く、どんな些細なことにも警戒心を抱きつつ生きるしかない。ここはそう言う世界だった。

銃に手をかけたまま、注意深く外の様子を窺う。すぐ近くに人の気配はない。彼女はゆっくりと店の外に出た。

周囲を見回し、彼女は不意にその目を見張った。ゴミ置き場に誰かが居る。もちろん猫などではない。それは紛れもない人間だった。性格には人間の足、だ。二本の足が無造作に投げ出されている。

ぴくりとも動かないその両足を見て、ただ酔いつぶれて眠っているだけか、それとも死んでいるのかを離れた場所から判別すること

は難しい。

彼女は慎重な足取りでその足の方へと近づく。ゴミの据えた匂いの中にかすかではあるが血の匂いが感じられた。

「死んでいるのか？」

その足の傍らに立ち、彼女は無言のままにその人物を見下ろした。その男は眠っているようだった。

全身に及ぶけがを負ってはいるが、死に至るほどのものではないらしい。規則正しく上下する胸が、その事実を伝えていた。

見た感じ、まだ若い男のようである。眠るその顔が妙に幼く見えた。

彼は見事な黒髪をしていた。一瞬どきりとするが、たぶん中国人だろうと思ひ直す。この辺りで中国人を見かけることはよくあることであつたから。それにそう思う方が、遠い島国の人間がここにいると考えるよりも遙かに現実的だった。

『おい、しつかりしろ！』

なぜか放っておくことができずに、その声をかける。その声に答えるように青年「大神はわずかに身じろぎをし、目を開けると、髪と同じ黒い瞳で少女を見上げた。その少女は大神のよく知る人物だった。まだ頭が覚醒していないのか、彼女の名前がどうしても出てこない。それは何よりも愛しい、そんな名前であるはずなのに。」

『「どうした？大丈夫か？」』

自分を見上げたまま、一言も発しない大神の様子に不安を感じたのか、彼女が再び声をかける。その言葉はもちろん英語だ。大神は目を見開き、それからかすかに首を傾げる。

彼女はなぜ、いつものように日本語を使わないのか？」と。

そんなことを思った瞬間、不意に彼女の名前が頭に浮かんだ。

「良かった。やっと思い出せたよ、君の名前を……」

独り言のようにつぶやき、微笑んだ。

そんな大神の言葉を聞いて、今度は少女の方がその面を驚愕に凍り付かせる。

聞き慣れない異国の言葉。しかしそれは少女にとって決してなじみ無い言葉ではなかったのだ。

その不思議な響きを持つ言語は彼女のもう一つもふるさとのもの。亡き母の生まれた国、日本の言葉だった。

なぜ？ - その言葉だけが頭の中をぐるぐる回っていた。

しかしその驚きも、次に発せられた大神の言葉でさらに大きなものへと変わる事となる。

「でも、良かった。君が居てくれればもう安心だね、マリア……」
少女ーマリア・タチバナは大きく目を見開いた。驚きのあまり声も出ない。

自分はこの青年と会ったことはないはずだった。マリアの知る日本人は、亡き母一人だけのはず。それなのになぜ、この行き倒れの日本人は自分の名を知っているのだろうか？

そのことを問いかけようとして、再び彼の方へと視線を戻したマリアは、それがかなわないことだと気付く。

彼は眠っていた。この上もなく安心してしまった寝顔で。

吐息を一つ。

このまま放っておくわけにもいかないわねー彼女は立ち上がり、店の方へと向かう。今日はこれで帰るーそのことを店主に伝えるためだ。

さて、理由はどうしよう？

マリアはほんの一瞬立ち止まり、そうだなーと考える。視界の端に、爆睡中の大神の姿が映った。

ーけがをした野良猫を拾ったとも言っておこうか？

その思いつきにマリアは口元にかすかな笑みを刻む。本当に無造作に、無意識に。

それはここ最近、彼女の顔に浮かぶことのなかった、ごく自然な優しい笑顔であった。

第2章 3

第2章 3

意識のない男に肩を貸し、やっとの思いで自らのアパートに着いたとき、けがのせい、男は発熱をしているように見えた。

玄関先にどさりと降ろした男の頬がやけに紅いことに気付き、乱れた息を整えつつ、その額に手を当てる。そこは燃えるように熱くなっていた。

彼の熱に気がついたマリアの行動は早かった。

汚れた服を脱がせ、下着一枚にすると、その体をベットの巾着へと押し込む。あるだけのタオルケットや毛布でその体を包み、額を冷たいタオルで冷やした。だが、それだけのことで高熱が下がりきるはずもない。薬を与えようにも、そもそも彼女の部屋に薬なんて代物はおいていないのだ。買いに行こうかと思いはしたが、意識のない彼を一人おいておくのはどうも心許ない。結局マリアはそのまま青年が目覚めるのを待つことにした。

となると、今彼女にやれることはそう多くない。

噴き出す汗を拭ってやり、額のタオルをこまめに代えながら、マリアは黙って彼の寝顔を見つめていた。

そうしているうちにも、彼はうわごとのように何度もマリアの名をその唇に乗せる。大切そうに紡がれる自分の名前を聞きながら、何とも言えず不思議な気持ちがあった。

何度見ても、自分はこの男の顔に見覚えはない。それなのに彼は大事な人の名を呼ぶように、優しくマリアの名前を口にするのだ。

なんだかへんな気分だ。マリアは思う。だがそれは決して不快な感情ではなかった。

（お前は私を知っているの？それとも私によく似た誰かを知って

いるだけ…?)

声に出さずに問いかける。知りたいが、眠る男から答えを引き出せるはずもなく、マリアはおとなしく彼の目覚めを待つ。じっと彼の横顔を見つめながら。

そんなマリアの見ている前で、彼は再びマリアの名を呼ぶ。彼女の存在を求めて伸ばされた手に、とまどいながらもそっと己の手を重ねた。

熱い手だった。それはまだ熱が高い証拠だ。空いてる方の手を伸ばし、額の汗を拭く。

「マリア……」

彼の声が愛おしそうに彼女を呼び、熱い手の平に力がこもる。そこに、確かに彼女の手が存在することを確認し、彼はふわりと微笑んだ。本当に、この上もなく幸せそうな、そんな笑顔で。

そんな彼の笑顔に目を奪われ、そのことに気付いたマリアは思わず苦笑を漏らす。

深い寝息を繰り返す彼の目覚めは、まだ当分先のことになりそうだった。

第3章

第3章

太陽が昇り、ニューヨークに新しい朝の訪れを告げる。

その光は余すことなく世界を照らし、窓から降り注がれるまぶしい日の光に人々もまた朝の訪れを知るのだ。

その日、大神一郎の朝も、そんなふうに始まった。

カーテン越しにも十分明るい朝日に、大神はゆっくりと目を開けた。

見慣れた自分の部屋とは違う天井をぼんやりと見つめ、ここはどこなんだろう、と考える。体の芯が妙にだるい感じだった。

しばらくそうしてぼーっとしていた大神は、自分の手が誰かの手を握っていることに気がついた。その手を追うように視線を移動させていくとそこには、大神の手を握りしめたまま眠るマリアがいた。きつと大神の手を引き剥がすことができずにそのまま眠ってしまったのだらうと、こみ上げる愛しさをかみ殺し、彼女の肩に手を伸ばす。そつと触れた彼女の細い肩は、すっかり冷たくなっていた。

申し訳ないことをしたなー大神は思う。どんな理由か分からないが、彼がベッドを占領してしまったのは確かなようだ。早く交代して、彼女をベッドで休ませてあげよう。大神はマリアの肩を驚かせないように揺すり、その目覚めを促す。起こさずとも、抱き上げてベッドに運んでやればいようなものだが、それを思いつかないところが彼らしいとも言えるだろう。大神はそつと小声で彼女の名を呼んだ。

「マリア……マリア……」

その声が聞こえたのか、彼女の目がうつすらと開き、エメラルドの二対の瞳が大神の顔を認める。

「良かった、やつとー」

目が覚めたんだねーその言葉も言い終わらないうちに、大神のこめかみに、目にも留まらぬ早さで何か堅く冷たいものが押し当てられた。

エンフィールド改一大神もよく知るその銃を突きつけて彼女の不機嫌な声が詰問するように響く。

『何者？』

それは英語での問いかけだったが、海軍時代、異国人と会うことも少なくなかった大神は何かその言葉の意味を理解する。次いで訪れたのは混乱だった。

マリアがなぜ、そんなことを問うのか。そして自分は どうして彼女に銃を突きつけられているのだろうか。自分は何かマリアを怒らせるようなことをしてしまったのだろうか？

そんな見当違いなことを考える大神が答えを導き出すより先に、マリアの意識がやつと眠りから覚醒した。

目を瞬かせ、目の前の青年を改めて見つめたマリアは小さく息を付き、銃を懐へしまい込む。

『…そう言えば、夕べは野良猫を拾ってきたんだったわね』

すっかり忘れていたと、独り言のようにつぶやかれた彼女の言葉の意味を理解しきれなくて、大神はきよとんとその顔を見つめた。だが、雰囲気から誤解は解けたようだと感じ取り、いつものように彼女に話しかける。いっさい日本語を使わない彼女をおかしいと思わなかったと言えは嘘になるが、その時の大神は自分がどんなことになっているか、まるで理解が及んでなかった。

「ねえ、マリア。ここはどこなんだ？帝劇じゃあ、ないよな？」

『テイゲキ？それは場所の名前なのか？お前はいつたいどこから来た？』

彼女の発した言葉に大神は困惑の表情を隠せない。

「マリア？それはいつたい何の冗談……」

とまどいつつそう言いかけた大神は、はっとして目の前のマリア

を見直した。

彼女がマリア・タチバナであるのは間違えようがない。その顔も、声も、仕草も―それは紛れもない彼女のもの。だがそこにほんの少しの違和感があった。

いつもの彼女より少しだけ長く伸ばされた髪、大神が見知るものよりわずかに幼く見える顔立ち―。そして何よりも大きな違和感。彼女の美しいその瞳にあった。まるで他人を見ているかのような眼差し。それは出会ったばかりの頃の彼女を、大神の脳裏に鮮やかに浮かび上がらせた。

「ごくりを唾を飲み、大神はつたない英語で彼女に問いかける。いったいここはどこなのか、と。」

怪訝そうな表情で、それでも彼女は律儀に答えてくれた。半ば大神も確信していたその名前―米国の大都市、ニューヨークの名前を。大神は自分を実験台にした少女を思い、天を仰いだ。まいった―それが正直な感想だ。それと同時に思う。君はやっぱり天才だ―と。かつて、まだ帝国歌撃団に入る前―マリアがどこにいたのか、大神はそのことをよく知っている。

ここはニューヨーク。ロシア革命の後、故郷を離れたマリアがしばしその身を潜めた大都会。

今の大神はなぜかその土地にいて、目の前にはその当時の、過去のマリアがいる。紅蘭の発明品は、確かに大神を過去にとばすことに成功したのだ。

『答える。いったいどこからやってきた？お前は…日本人なのか？』

そう問いかけられたものの早口で言われたため、理解できずに彼女を見た。そのことにマリアも気がついたのだろう。再び、今度はゆっくりと質問を繰り返す。

今度は大神にも理解できた。日本人か―その問いに、大神は頷いてそうだと答える。その瞬間マリアが複雑な顔をしたのを、大神は見逃さなかった。

彼女の母親は日本人だと言うことは前に聞いて覚えている。そのことが彼女の心にいろいろと複雑な感情を呼び起こすのだろうと、そんなことを思いながら黙ってその端正な横顔を見つめた。

そうして物思いに沈む彼女を見つめ、どれくらい経っただろう？ 大神はふと、自分が昨夜の礼を言っていないことに気付いた。彼女がけがをした大神をここに運び込んで面倒を見てくれたのだ。今の彼女にとって大神はなんの関係もない人間だ。放っておいても良かったはずなのに、それでも彼女はこうして大神を助けてくれた。そんな優しさは大神のよく知るマリアと少しも変わらない。そのことがなんだかとても嬉しかった。

『昨日は助けてくれてありがとう、マリア』

たどたどしい英語での礼に、マリアが軽く目を見張るのが分かった。何か間違ったかなと、少し不安になる。元々、英語は得意じゃないのだ。わざわざ英語を使ったのは、彼女の使う言葉で礼を述べるのがやはり礼儀にかなっているだろうと思つてのことだった。本来なら彼女の母国語であるロシア語で礼を述べるべきなのだろうが、残念なことに大神はロシア語を全くと言つていいほど使えない。前にマリアと行ったロシア旅行で、簡単なロシア語を習いはしたが、所詮は付け焼き刃。まるで役に立たない状態だ。

今度、マリアにきちんとロシア語を習おう！自分のあまりの不甲斐なさにそんなことを考えながら、いつまでも返事を返さないマリアを、大神は不安そうにじつと見上げた。

『別に、礼などいらぬ』

少し経つて、ぼつりと返された彼女の言葉はなんだか不機嫌そうに聞こえた。が、その耳がほんのりと薄紅に染まっている。それを見て不機嫌に聞こえるその声は、彼女の照れ隠しなのだと分かつて、大神は思わず微笑みを浮かべた。

ここにいるマリアは、まだ大神との出会いを果たしておらず、もちろん大神のことを知る由もない。それでもわずかな仕草や言葉の端々が大神の知る彼女に重なる。もちろん積み重ねた時間が違つと

言うだけの同一人物なのだからそんなことは当たり前だろうが、大神にとってはそんなごく当然な事実が、妙に嬉しく―彼女の見せた照れ屋で意地っ張りなところがなんだかとても愛おしく思えた。

そっぽを向いたままの彼女に、大神は微笑んだまま―今度は日本語でその言葉を伝える。

「それでも俺は、君に礼を言いたいと思っただ。本当に、ありがとう」

再び繰り返された感謝の言葉。どんな顔をしていいのか分からず、怒ったように大神を見るマリア。緑の宝玉が二つ、真っ直ぐに大神を睨みつけ、大神もまたその瞳の息をのむような美しさに目を奪われた。

どれだけそうしていただろう。先に根負けしたのはマリアの方だった。すつと目をそらして小さな吐息。それからふと思いついたように再び大神を見て問いかける。体の調子は大丈夫なのか、と。

彼女の気遣いが嬉しくて、大神はまるで子供のような満面の笑みをその面に浮かべた。大丈夫だよ―そう答え、ありがとう、マリアを見上げる。

マリアは諦めたようにため息をついた。何を言っても無駄だと悟ったのだろう。ただ苦虫をかみつぶしたような表情で、大神を少しだけ睨んだ。

そんなマリアの表情すら新鮮で、全く応えた様子もなくにこにこ笑う大神に、少しぶっきらぼうにも聞こえる口調で食べたいものがあるかと尋ねるマリア。食べられるようなら食事はした方がいいから、と。

「ボルシチ！」

迷うことなく大神は答えた。それはマリアが得意とするロシア料理だ。そして大神とマリア、二人にとって思い出の料理でもあった。もちろん今目の前にいるマリアがそのことを知るはずもないが、それを抜きにしても大神は彼女の作るボルシチと言う料理が大好きだった。

そんな大神の言葉にマリアの目が、大きく見開かれる。何か強い衝撃を受けたような、そんな表情。そのまま彼女はなぜか食い入るように大神の顔を見つめていた。

突如豹変した彼女の表情。その強い眼差しにさらされて、大神はとまどい困惑する。自分は彼女にシヨックを与えるような、そんなことを言っただろうか、と。それからおずおずと、

「ダメ…かな？」

そう尋ねてみた。

『…いや…そう言うわけではないが…』

彼女は歯切れの悪い口調でそう答える。何かを探すように大神を見つめていた目が不意に逸らされた。そしてそのまま乱暴に大神の肩を押し、その体をベットの中に押し込む。寝ているーそう言ってマリアは毛布をその肩口に引き上げた。

『材料がないからボルシチは無理だ。代わりに何か、胃に負担のないスープでも用意してくる。それまで少し、休んでいる』

大神はおとなしく布団にくるまり、彼女の言いつけに従う。まだ本調子でないことは、自分が一番よく分かっていたからだ。

丸くなり少し眠っておこうとしたとたん、彼女の言葉が降ってきた。

『そういえば、お前…名前は？』

「名前？そうか、まだ言っただけだね。俺は大…」

大神一郎と、正直に本名を答えかけ、大神は慌てて口をつぐむ。

紅蘭に注意されたことを思い出したのだ。

言いかけて、口を閉じた大神に怪訝そうな眼差しを向けるマリア。そんな彼女に向かってごまかすように微笑み、「一郎だよ」と、短く答えた。

それを聞いたマリアは、覚えるように今聞いたばかりの名前を口の中で繰り返している。その響きが耳に新しく、大神は首をすくめて小さな笑みを漏らした。

ーマリアは俺を隊長としか呼ばなかったからな

だからだろうか。彼女の声で響く自分の名前は妙に新鮮だ。心地よく耳に響くその声を聞きながら、大神はくすぐったそうに笑うのだった。

第4章 1

第4章 1

へんな男だーとはマリアの大神に対する正直な感想だった。

食事の後、眠りはじめた大神を置いて、マリアはいつものごとく酒場へと向かっている。日々の生活がかかっているのだ。そう簡単に休むわけにも行かない。

その酒場へ続く道を一人歩きながら、マリアはずっと彼のことがばかりを考えていた。

日本という島国出身の、突然現れた不思議な男。彼がいったい何者なのかということは結局まだ何も聞き出せていない。軽い食事を終えた後、彼が再びまどろみの中に戻ってしまったせいだ。

どうも調子が狂うーマリアは軽い吐息を漏らして思う。いつもはこうじゃないのに、と。

頭の中に浮かぶのは、あの脳天気としか形容使用のない笑顔を浮かべる青年の顔だ。何が楽しいのか分からないが、彼はマリアの顔を見るたびにとろけるような笑顔をその面に浮かべる。真面目な顔をしていればそれなりに精悍な顔をしているというのに、笑うととたんに情けない顔になるのだ。

マリアは情けない男は好きじゃない。それなのになぜか彼の笑った顔を、決して不快ではないと感じる自分がある。

それに彼を見るとなぜかある一人の男が思い出されて仕方がないのだ。まるで似ていない、共通点もない二人だというのに。

黒系の髪に金系の髪。黒曜石の瞳と青玉の瞳。もちろん顔立ちだって違う。それなのにどこか似ているー。

いったいどこが似ているというのか？あの人と、あの男とー少し考えて、その答えに行き着く。

それは瞳だ。一郎という日本の青年は、なぜかとても優しい目をしてマリアを見る。それはそれは優しく柔らかな眼差しで。それはかつてあの人がマリアにたいして向けた眼差しとよく似たものだった。

それから、食べたいものは何かと聞いたとき、彼の口から飛び出したあの言葉。ボルシチは、あの人が好きな料理の一つだった。だからその名前が彼の口から出たときは、声も出ないくらい驚いた。そしてそれと同時に思い出した。かつてともにいた頃の、あの人のまぶしいくらい笑顔を一

第4章 2

第4章 2

ボルシチが食べたいー彼の口からその言葉を聞いたのは、決戦前夜のことだった。

ユーリー・ミハイル・ニコラーエビツチ

彼はマリアの人生に劇的な変化を与えた人物であった。

よく、笑う男だった。正義感が強く、男気があり、明るく、優しい心根のその男は誰からも慕われ、頼りにされていた。

はじめはただのお節介な男としか思わなかった。目障りだとか感じていなかった彼を、特別なものとして意識し始めたのはいつのことだったかー今となっては思い出すこともできない。彼はまるで空気のように自然に、さりげなく、いつの間にかマリアの心の中に入り込んでいた。同じものを目指し、共に戦い、過ごすうちに、彼は彼女の中で消すことのできない大きな存在へと変わっていったのだった。

その夜ー運命の日の前夜。

眠れずに、野営地の見回りをしていたマリアはたき火の前に座る彼の姿に気がついた。もう、軽く深夜を回っている。

彼も眠れないのかーそんなことを思いながら後ろから近づいていくと、気配に気がついたのか振り返り、そこにマリアを見つけて彼はにっこりと笑った。それはいつもと同じ、マリアを落ち着かなくさせるーそんな笑顔だった。

一瞬、踵を返して逃げ出してしまいたい衝動に駆られる。だがマリアはそれを行動に移すことなく、顔に出すこともせずそのまま進んで彼の隣に腰を下ろした。

「眠れないのか？」

彼のそんな問いかけに、それはあなたの方でしょうと返すと、

「違うない」

そう言つて彼が笑う。その笑い顔に再び胸の高鳴りを感じ、マリアは横目でそつと彼の顔を見上げた。それに気付いた彼が目を優しく細めてマリアを見る。その眼差しに思わず頬を染めたマリアは、目の前にある炎へと目を移した。その火の赤さが頬の紅さを隠してくればいと、そんなふうには思いつながら。

「明日の戦いが気になるのか？」

「明日の戦いはきつと今までで一番激しいものとなるでしょうから」

気にならない方がおかしいと、自分を見上げるマリアの素直な瞳と出会い、彼はまた少し笑つた。柔らかな金髪に大きな手の平を乗せ、普通はそんならうな」と、そう言いながら。

普通は―その言葉を聞きとがめて、マリアが怪訝そうな顔をする。

「あなたは違つんですか？」

「違う訳じゃあ、ないけどな」

そう言つてその面に苦笑を浮かべる。そしてそのままマリアの耳元に唇を寄せ、内緒話をするようにそつとささやいた。実は、腹が空いて眠れない―と。

予想もしていなかつた答えに不意をつかれ、唾然として彼を見上げてしまう。そんなマリアの表情に彼は照れくさそうに頭に手をやった。とたんにグーッと彼の腹の虫が大きな音をたてて騒ぎだした。堪えきれずに吹き出してしまふマリア。その横で、彼もまた、目の淵を紅くして笑つた。

それはこれから始まる戦闘など感じさせないくらい穏やかで、優しい時間。二人は静かに目の前の炎を見つめていた。

やがて―。東の空がうつすらと白みだしたのを見て、マリアは立ち上がる。こちらを見上げる彼に微笑み、

「もうすぐ朝です。少し休んでおきます」

そう告げた。

「そうか…」

彼もマリアに微笑んだ。その瞳を見返して、あなたも少し眠ってくださいーそう言うマリアに、眠れるかな？ -と渋い顔で返す彼。空腹を訴える腹に手を当てたまま、何とも情けない顔をしている。そんな彼に、マリアは言った。

「戦いが終われば、食料も手に入ります。そうしたら、あなたの好きなものを何でも作ってあげますよ。だから、それまでの我慢です」

「ーそうだな。後もう少しの辛抱だ。マリアの料理を楽しみに頑張るか」

そう言って、彼もまた立ち上がった。うーんと、大きくのびをした彼に、何か食べたいものはあるのか尋ねてみる。

「-マリアの作った、ボルシチが食いたい」

迷うことなく、照れもせず、真っ直ぐな眼差しで告げられた言葉に、マリアは白い頬を紅に染めて、顔をそらせた。

「-物好きですね」

並んで歩きながら照れ隠しにそう言くと、彼は再びあの優しい眼差しをマリアに向けた。

「そうか？マリアの料理は世界一うまいよ」

笑いながら平気でそんなことを口にする。マリアはさらに顔を紅くして上目遣いに彼をにらんだが、それも長くは続かず、最後には「仕方ないですね…」と嘆息した。いつだってマリアは彼にかなわない。そのことは自分でもよく自覚していることなのだから。

分かれ道ー。彼は左へ、マリアは右へ。それぞれに割り当てられた天幕へと戻るため、二人は別れて歩き出す。

しばらくそうして歩いた後、不意に彼が振り向いてマリアを呼んだ。

「マリアー」

立ち止まり、彼を顧みたマリアは、自分を見つめる真剣な眼差しに目を見開いた。

「隊長？」

問いかけるような、そんなマリアの声に、彼は口を開きかけ―それから思い直したようにその口元に苦笑を刻んだ。

「いや。なんでもない。焦って言うことでもないしな。この戦いが終われば、いくらだって時間はあるさ…。」

「…？」

訳も分ならず首を傾げるマリアに、彼は柔らかな笑みを向ける。

「お休み、マリア」

そう言っつて背を向けた彼を、マリアは瞬きもせずに見送った。なぜか、理由もなく胸が騒いだ。

そうして彼の背が見えなくなるまで見送った後、マリアもまた自分の天幕へと向かう。彼が何を言いかけたのか―気になりはしたが、また別の機会に聞き出すこともできるだろうと、自らを納得させて。

それがかなわぬことになるとも知らないまま―

それは、マリアと彼との最後の夜の記憶―見上げた空に無数の星の散る、美しい夜のことだった。

第4章 3

第4章 3

「よお、マリア。何こんな所でぼーっとしてんだ？」

突然かけられた声に思考を中断されたマリアは、自分がいつもの酒場の前に立っていることに気がついた。考え事をしながら歩くなり、いつの間にかついていたのだろう。どうやらそのことにも気付かず、ずっと物思いに耽っていたようだ。

マリアは目の前の建物を見上げ、それから振り向いて自分に声をかけた相手を見た。

そこにあつたのはにやにやと人を食った笑みを浮かべる男の顔。その顔を一瞥し、マリアは小さく息をつく。面倒な相手にあつてしまったとばかりに。

ボードウィル・グラスマンーアメリカ生まれのこの男は、なぜかいつもマリアにつきまとう。それはもう、うるさいくらいに。悪い男ではないのだが、そのことにはいつも辟易させられた。

しかし、そうやって鬱陶しく感じつつも、マリアはこの陽気な男を決して嫌っているわけではなかった。だからといってそれは好きということと同意でもなく、彼に特別関心があるかと問われれば、否と答える他はないのだが。

マリアの心に彼の居場所はない。マリアの心にあるのはただ一人の人。思いを伝えることもないまま永遠に失われた、誰よりも愛しい男。それ以外の誰の入る余地も、彼女の心にはないはずだった。

そのはずなのに、今、そこに入り込もうとする者がいる。マリアの心の、ほんのわずかな隙間から。

昨日傷ついた彼を見つけてからまだ一日と経っていない。それなのに彼という存在を胸の内から閉め出すことのできない自分に、マ

リアは気付いていた。

不思議な青年だ、と思う。彼の素直な笑顔もその瞳も、人の心を不思議と和ませる。それは凍てついたマリアの心も例外ではなかった。

彼のことを考えながら、マリアは酒場の扉を押し開ける。そこから漏れ出たもつすつかり嗅ぎなれてしまった匂いに目を細め、マリアはゆっくりとその中に足を踏み入れた。

入り口にたち、カウンターの向こうにいる店主を見る。彼の瞳が彼女の姿を認め、そして頷きが返ってくるのを確認し、マリアはいつもの定位置へと足を向けた。

店の隅、酒場の喧噪からわずかに離れたその場所に腰を落ち着けて、ゆっくりと薄暗い店内を見回した。まだ時間も早いせいか、酒に飲まれて暴れ出す者は見受けられない。荒れくれ共は、日頃の鬱憤を晴らすかのように豪快に酒をあり、陽気に肩をたたき合い、笑いあっている。マリアの出番はまだ当分ありそうになかった。

視線を目の前のテーブルへと戻し、マリアは再びあの青年のことを思った。彼のついて知っていることはごくわずかだ。

日本人だと言うこと、一郎という名前だと言うこと、そしてなぜか、マリアの名を知っていると言うこと。それは本当にささやかな情報にすぎない。彼に対する探求心を満足させるにはまるで足りないその情報を前に、マリアはじっと、思いを凝らすようにして一郎という青年のことを考える。

彼は何者なのか？なぜマリアの名を知っているのか？いつたいたんな経緯をたどってこの場所へ、マリアの目の前に現れたのか？

聞きたいことは山ほどあった。だが、そんな大量の疑問を押しつけて、マリアの心に浮かんだのはただ一つの問い。

「なぜ彼は、私にこんなにもあの人のことを思い起こさせるのか……？」

それは、たとえ彼に問いただしたとしても決して答えの見つかる質問ではないだろう。第一彼は、マリアの言う「あの人」を知りも

しないはずだ。だが、それでも彼女は聞いてみたかった。なぜ彼の笑顔はあんなにもあの人のものと重なるのか、と。今までどんなに望んでも決して思い描くことのできなかつたあの笑顔に――

彼が壮絶な死を遂げてマリアの前からいなくなり――気がつくともマリアはあの人の顔を思い出すことが出来なくなっていた。彼を思うとき、脳裏に浮かぶのはいつも変わらぬただ一つの映像。それは無数の銃弾をその身に受けて、白い大地を深紅に染め上げ倒れる、愛しい人の姿。ずっとずっと思い出せなかつたのだ。彼の声も、笑顔も、そのまなざしさえも――

そして再びマリアはあの青年を思う。彼は今どうしているだろう。まだ眠っているのだろうか？それとも目を覚まし、マリアの不在を心細く思っていないだろうか？

もちろん彼とて一人前の男だ。そんな心配は無用だろうが、それでもマリアは彼のあの深い瞳を思い、なぜかその身を案じている。

不思議な気持ちだった。自分が再び、他の誰かをこんな風に気にかけるようになるとは思ってもいかなかった。あの日、彼を失ったあの瞬間――自分の心は永遠に溶けない氷に閉ざされたと、そう思っていたのに――

不意にさして明るくもない照明を遮るように立ちはだかる人影に気付いたマリアは、顔を上げその人物を見上げる。そこに見慣れたアメリカ男の顔を見つけ、彼女は小さく嘆息し、

「……邪魔よ」

にべもなくそう言い放つと、冷たく彼を睨んだ。しかし彼――ボードウィルはそんな彼女の眼差しに臆することもなくそのとなりの腰掛けてくる。にやにやと、人を喰ったような笑みには腹も立つが、それでも彼のそんな表情に悪意は感じられない。再び漏れる小さな吐息。それに気付かない振りをして、怒りの表情すらも美しい彼女の顔を見つめるボードウィル。しばらく彼を睨みつけていたマリアだが、結局その存在を無視することに方針を決めたらしい。素っ気ない仕草で彼から目をそらし、その視線をそのまま薄暗い店内へと

転じた。

「そう冷たくするなよ」

そんなマリアを見たボードウィルは、言いながらマリアの目の前に持っていたグラスを置いた。その透明な液体に満たされたグラスに目を落とし、それから再び顔を上げ隣に座る男に、それで？と目で問うマリア。

そんなマリアの態度に男はその口元に隠せない苦笑を張り付け、飲めよ、そう促した。奢ってやるーそんなふう言いながら。

押しつけがましい言い方だ、とマリアは思う。だがそんな言い方をしても妙に憎めない、そんな雰囲気はこの隣の男は持ち合わせていた。

いらないと、断ることは簡単だった。だが今日は、そうすることがなぜだかためられた。

ほんの少し考えた後、グラスを手に取ったマリアを見たボードウィルは、目をまん丸く見開いてその驚きを表現する。彼の酒を彼女が断らなかったのはこれが初めてのことだった。

「なに？」

なみなみとつがれた酒を飲み干して、グラスをテーブルの上に戻したマリアは、自分を凝視する男に短く問う。翡翠の瞳に彼の顔を映しながら。

その鋭く澄んだ眼差しに思わず目を奪われた彼は、返事をするのも忘れて彼女に見入ってしまう。

だが、それもほんの一瞬のこと。次の瞬間には不快そうなマリアの瞳に睨みつけられ、ボードウィルはその面にごまかし半分の乾いた笑みを浮かべた。そして、まだ口を付けていない自分のグラスを差し出し、飲むか？と聞いてみる。マリアは一瞬そのグラスに目を落としーそれからはっきりと今度は首を左右に振った。

そんな普段見慣れた彼女の様子に何となくほっとしたものを感じながら、口元をかすかにほころばせ、グラスをそっと傾ける。喉を焼く熱い液体に目を細めて見つめる先にある彼女の横顔は、いつも

と同じように冷たく冴え、その目に映すことすらためらわれるほどに美しい。

唇から漏れる感嘆の吐息。

彼女の横顔を視界にとらえたまま、ボードウィルは一人静かに杯を重ね続けた。

第4章 4

第4章 4

「どれくらいそうしていただける。」

不意に立ち上がった彼女を、ボードウィルは夢から覚めたような思いで見上げた。気がつかないうちにだいぶ飲んでいたようである。目の前には中身の無い瓶が数本転がっていた。

「どうしたんだ？」

多少ろれつが回らなくなった口調で尋ねると彼女はほんの少し彼の方を見た。

「今日はもう帰るわ」

帰ってきた返事にボードウィルは、今度はぽかんと間抜けに口を開けたまま、彼女の顔をまじまじと見つめてしまう。

だいぶ夜が更けてきたとはいえ、酒飲みにとってはまだまだ宵の口である。用心棒としての彼女の仕事はこれからが本番のはずだった。

それなのにもう帰る？ いったいどういう風の吹き回しだろうと首を傾げたとき、昨夜仕入れた情報が酔いの回った頭に浮かび上がった。

あの冷血女が怪我した野良猫を拾ったらしいーと、まことしゃかに流れたその話を昨晚は他の仲間と共に笑い飛ばしたものだだったが、もしかしたらあれは本当の話だったのかも知れない。彼女が今日に限って早く帰る理由が、その怪我をした猫だとしたら、それはそれで筋の通った理由がでかあがるではないか。

そんなことを考えながらボードウィルは興味深そうにしげしげとマリアの顔を見る。彼女の美しい容貌に惹かれ、普段からうるさいくらいにまとわりついてはいるものの、彼女のことをどれだけ知っ

ているかと問われれば、ほとんど知らないと答えるほかない。ボードウィルが彼女にたいして抱いていた印象は、他の酔っぱらい共が彼女に対して抱くものと大差ないものだ。美しいが冷酷で、情け容赦のかけらもない―それが今現在マリアの周りにいる人々が彼女に対して抱く印象のほとんどだった。

―マリアが野良猫の世話…ねえ

彼とてマリアにそんな優しさが全くないと思っっているわけではない。ただ極端に想像しにくい、と言うだけのことである。

まあ、たとえマリアが猫の世話をしようが、そうでなかつても、ボードウィルにはまるで関係のない話だ。そのまま放つて置けばいいようなものだが、元々が好奇心の強い彼のことである。黙っていられるはずもなかった。

「猫は元気になったのか？」

「…猫？」

ボードウィルの問いかけにマリアが真面目な顔で首を傾げる。そんなマリアの反応に、彼もまた首を傾げ、

「野良猫、拾ったんだろう？昨日―」

重ねられた問いかけに、やっと何のことを言われているのかに思い至つたのだろう。ああ―とマリアが頷いた。

「猫…ね」

そう言えば昨夜は店を早くでる言い訳にたしかそんな話をしたような気がする。今思うと何とも嘘臭い言い訳だと思うのだが、周囲はどうやら本気にしていたようだ。まあ、拾いものをしたことは確かだから、あながち嘘とは言いつけないことではあるのだが。

野良猫と称し、連れ帰った青年の顔を思い浮かべながら、マリアはその口元に浮かびそうになる苦笑をかみ殺す。

素直で優しい目をしたあの青年に、野良猫のイメージはどうもそぐわない。彼をたとえるならばむしろ犬であろうと思われる。しかも―

「猫って言うより、人なつこくてやんちゃな子犬って言った方が

なんだかしっくりくるわね……」

独り言のようにつぶやいて、マリアは一人戸口の方へと向かった。家ではきつとお腹を空かせた可愛い子犬がマリアの帰りを待っているだろう。何か食材を買って早く帰ろうー彼女がそんなことを考えているなどつゆ知らず、ボードウィルは何とも言えない表情でその背を見送る。彼女が拾ったのは猫ではなくて犬だったのかと、そんなまるで見当違いなことを思いながらー。

第5章 1

第5章 1

空腹を訴える腹の虫に目覚めを促され、目を開けてみると、窓の外はすっかり暗くなり、明かりのない部屋も薄暗闇の中に沈んでいた。

寝起きで、まるで頭の働かない大神は、マリアの姿を探してぼんやりと部屋の中を見回す。が、目の届く範囲に彼女の姿を見いだせず、大神は熱の名残か、まだだけだるさの残る体を起こして、もう一度ゆっくりと首を巡らせた。しかし、部屋のどこにも彼女の影はなく、耳を澄ませてみてもその存在を感じさせる物音一つしない。どうやら大神が寝ている間にどこかへ出かけてしまったらしい。

「こんな時間までいったいどこに行ってるんだ？」

マリアが酒場で用心棒をしているなどは夢にも思わない大神は、分厚いカーテンを開けて窓の外を見ながら形のいい眉をひそめた。

薄い窓を通して差し込む明かりの主は、夜空の中空に座し、その存在を主張している。はつきりとした時間は分らないが、もうだいぶ遅い時間だろう。マリアのことが心配だった。

そんな大神の杞憂を知れば、彼女からは余計なお世話と煙たがれるかも知れない。大神とて、マリアが大神の助けを必要としないくらい強いということは分かっている。でも、それでも、大神は彼女を案じずにはいられない。それは理屈などで割り切れるものではなく、しばらく不安そうに窓の外を眺めていた大神は、心を決めたように一つ頷き、ベッドを降りた。まだふらつく足を踏ん張って、何かを探すように周りを見ていた大神は、ベッド横のサイドテーブルの上に探すものを見つけ、思わず微笑みを浮かべてしまう。洗濯され、マリアらしい几帳面さで綺麗にたたまれたそれは、その小さな

台の上、読書用のライトのしたにそつと置かれていた。

ズボンをはき、シャツに腕を通して初めて、それが新調されたばかりのものと気がつく。ズボンはともかく、真っ白なシャツに付いた汚れは落としきれなかったのだろう、と、自分の体についていた大小数え切れない擦り傷を思い返しながら大神は苦笑を漏らした。よく見てみれば、ズボンの方も決して無事と言える状態ではない。所々破けているのを丁寧に繕ったあとが伺える。彼女が大神の眠る横で繕い物をする様子が目に浮かぶようだった。

大神は微笑み、まだ頼りない足取りでドアの方へと向かう。この時代でのマリアも、大神の知る彼女と変わらず一生懸命で優しい。そのことが、無性に嬉しかった。

扉を開けると、冷たい夜の空気が頬を撫で、眠りから覚めきらない体を覚醒へと導く。まだ四肢に力は入らないが、それでも足はもうふらついてはいない。一段一段、階段を踏みしめながら、大神はゆっくりと階下へと降りていった。

通りを離れているせいか、暗闇に沈む路地は思いの外静かだ。見上げる空には満天の星。大神はしばしその光景に目を奪われ、それから改めて歩き出そうと前を見ると、正面から歩いてくる人影が目に映った。

夜の闇に、鮮やかな金髪が浮かび上がる。大きな荷物を抱えたその人物は目指す建物の前に立つ大神を認め、その緑の瞳を見張った。ほんの一瞬彼女の足が止まり、大神が駆け寄る。しかし、その足取りはまだ危なげで、マリアは眉を寄せ、彼の顔を鋭く見た。その眼差しに首をすくめた大神は彼女のいいたいことを素早く察して、

「君がいないから心配で、迎えに行こうと思ったんだ……」

と、言い訳じみた言葉を口にしながら、彼女の持つ荷物をそつとその手に受け取った。あなたの方がよほど危なっかしいわーそう思いはしたものの、口にはせずただ嘆息して、彼女は前を行く大神の背を追いかけた。

第5章 2

第5章 2

「ところで、こんなに遅くまでどこに行っていたんだい？」

「- 仕事よ」

階段を上りながらそう尋ねる大神の頬がかすかに上気しているのを見て取って、マリアは短く答えながら再び眉をひそめた。勝手に動き回ったりするから下がりがきらない熱がまた上がり始めたのだろう。たいして動いてもいないのにもう荒くなり始めた彼の息づかいがそのいい証拠だった。

再び暗い部屋の中へと戻り、荷物を置いて振り向いた大神の額にマリアの手の平が当てられる。その行為と、彼女の手の冷たい感触に驚いて目を丸くする大神に、熱がある、と少し怒った顔をする少女。

大丈夫だよーそう言い募ろうとすると、有無をいわずにベッドへ行けと、命令された。それでも、自分がもう大丈夫なのだとアピールしようと口を開きかけた大神は、不意に何かに気付いたように自分を見ている綺麗な顔を見つめーそれから嬉しそうに破顔した。マリアが本当に自分のことを心配していてくれると、そのことに気がついたから。

さあーと、マリアの指がベッドを指し示す。大神は、今度は素直に彼女の指示に従いベッドに潜り込むと、そこから彼女の顔を見上げた。

そうして横になったまま誰かを見上げると、なんだか頼りないよな、心細いよな、無性に人に甘えなくなるよなーそんな気分になってくるから不思議だ。

じっと見つめる大神の目から逃れるように視線をはずし、彼女は

台所へと向かう。とはいっても、さほど広くもない部屋だ。案外近くにある彼女の背に向かって、何をするのかと聞いてみる。そう口に出して見て、大神はそれが愚問であることに気がついた。何しろ彼女が向かった先は台所なのだ。そこに立つてすることと言えば一つしかあるまい。

「・食事の準備をするわ」

案の定、彼女の唇からもそんなにべもない返事が返ってくる。大神は苦笑し―それでも懲りずに再び彼女の背に問いかける。

「何を作るんだい？マリア」

肩越しに振り向いたマリアは、ほんの一瞬大神を見つめ、

「・ボルシチよ」

短く、そう答えた。

大神はまた嬉しくなって笑ってしまう。マリアはきちんと覚えていてくれたのだ。今朝の大神とのやりとりを。

「じゃあ、何か手伝うよ。料理は結構得意だよ？」

「ダメよ。病人は寝ていなさい」

いそいそとベッドから這い出そうとした大神に再び飛んできたマリアの叱責。大神は肩をすくめ―まるで小さな子供のように「はい」と素直な返事を返し、毛布を肩の所まで引き上げた。

しばらくして―。キッチンから響いてくるのは規則正しく彼女が操る包丁の音。そのリズムに眠気を誘われて、大神の瞼は自然と重くなってくる。

ほとんど閉じかけた目にマリアの背を映しながら、大神はその口元に幸せそうな笑みを浮かべ―そして今日何度目かの眠りの中へ落ちていった。

第5章 3

第5章 3

深夜―

ベッドに横たわる大神の隣にはなぜか下着姿のマリアが静かな寝息を立てていた。

何でこんなことになってしまったんだろう―暗闇の中、天井を見つめながら大神は今の状況を作り出したその原因について考えを巡らせる。

眠りにつくべき時間はとうに過ぎていたが、どうにも眠れそうにない。それは決して昼間寝過ぎたという単純な理由からだけでなく、隣に眠る少女こそが大神の睡眠を妨げる最大の原因だった。

彼女はなんの屈託もなく健やかな眠りの中にいる。純粹なのか、鈍感なのか、はたまた、ただ単に大神を異性として意識していないだけのことなのか。あるいは彼女が大神のことを信用してくれている、その表れなのかも知れないが。

なんだか複雑な心境だった。嬉しいような、悔しいような、切ないような、なんだか笑い出してしまいたいような、そんな気持ち。ずるいよなあ―声に出さず、大神はそんなことを思う。

自分はマリアを意識しすぎて眠れないでいるのに、彼女はまるで涼しい表情で眠っているのだから。

本当に君はずるいな―思いながら、大神は横目でマリアの寝顔を盗み見る。眠る彼女の表情は年相応に幼く、あどけなく、そしてなんだか可愛らしい。

そんな可愛い寝顔を見せられたら、ずるいって怒ることも出来やしないではないか。

大神は口元を優しくほころばせ、それから再び天井を見上げた。

それからそつと目を閉じてみる。まだまだちつとも眠れそうにはな
かったが。

そして自分に向けてもう一度同じ問いかけを行う。

どうしてこんなことになったのか？

答えを探し大神の思考は過去へとさかのぼる。

そう、ことの起ころいは今からほんの少し前―

第5章 4

第5章 4

「今日は君がベッドで眠るといいよ」

食事が終わり、そろそろ休もうかという時間になり、何気なく大神が言ったその言葉に、マリアは酷く怪訝そうな表情で応えた。

「あれ？」

その表情に大神は一瞬首を傾げた。

特別おかしなことは言わなかったと思う。もしかして聞き取りずらかったかなーそんなふうを考えて大神はもう一度同じことを言おうと口を開きかけた。なぜそんなふうにしたかと言えば、それは大神がこの目の前の少女の日本語力をだいたい把握してきたからだと言える。この時代のマリアも感心するくらい上手に日本語を使いこなしてはいたが、それでも大神の知るマリアにはまだまだ及ばない。複雑な日本語を理解するのはやはり困難なようだった。

だが、そうして大神が再び同じことを繰り返す前に、マリアの方が先に、低くその言葉を発していた。

「なぜ？」

短く明確にそう問われ、大神はとっさに返事を返すことが出来ずに口ごもる。

「あなたはまだ熱があるわ。病人がベッドに寝るべきよ」

そうでしょう？と、マリアの瞳が問う。大神は情けなくもまた言いよどみ、それでも何とか抗弁を試みようとして口を開いた。

「だ、だけど。マリア…」

「いいから。おとなしくベッドに入りなさい」

そんな大神を一蹴し、マリアは彼のシャツの襟首をつかみ上げベッドの中へ押し込んだ。

まるで子供扱いだ。

実際には大神の方がだいぶ年上だと言うのに、マリアの目には頼りない子供のように映って見えるのかも知れない。

大神は上目遣いに、だが慥然とマリアの顔を見上げた。それに氣付いたマリアが、

「なに？」

そう言っただ大神の方を見た。

そんなマリアの冷静そのものの表情が、妙に氣に障って仕方なかった。そんなふうに感じることも自体、きつと体調が万全でない証拠であつたのだろう。

大神も本当は分かつていた。マリアの言うことが理にかなってると言うこと。それでも、熱があるせいだろうか。変に意地になり、大神はなんだか頑固なだっ子のように、

「君が床で寝るのに、俺だけベッドで寝られない」
そう言い張った。

呆れたようなマリアの眼差しが痛い。だが大神は主張を曲げずに真っ直ぐマリアを見上げていた。

「仕方ないわね……」

しばらくにらみ合ったあと、とうとうマリアがその言葉を口にした。吐息混じりの、独り言のようなかすかな声で。

大神はほっとしたように表情を崩し、それから嬉々としてベッドを彼女に譲ろうとした。だが、そうしてベッドを這い出そうとした大神の上にマリアの冷たい声が降り注ぐ。

「なにをしてるの？」

「えっ、なにっ……」

「ほら、さっさと奥へつめて」

きよとんとした顔の大神を、そんな言葉と共に奥の方へと追いやる。訳も分からないまま壁際へよった大神は次の瞬間大きく目を見開いて絶句した。

マリアが服を脱いでいる。正確にはシャツのボタンを半ばまでは

ずした状態だ。はだけた服の隙間から覗く白い肌が目に突き刺さるようだった。大神は慌てて目を閉じ、半裸のマリアに背を向けた。

「な、ななな、なにを」

「服を脱いでるのよ」

「だから、なんだって服を!？」

「服を着たまま寝たら、皺になるでしょう?」

何を当然のことをとばかりにマリア。その声には当然のことながらなんの動揺すら伺うことが出来ない。

一方、大神はと言うと、彼はまさに混乱の極みの中にあつた。背後から聞こえてくる衣擦れの音。あまりに艶めかしいその音は大神の心に良からぬ想像をかき立てる。

闇の中に浮かぶ白いしなやかな肢体―見たこともないはずのその姿をはつきりと脳裏に思い描くことが出来る自分なんだか酷くいやらしい生き物のような気がして、大神は目を閉じたまま耳からの情報も遮断しようとして両手で耳をふさいだ。しかし、そんな大神の努力をあざ笑うかのように次の瞬間、一人の重さを受けてベッドが大きくきしんだ。そして大神の鼻腔をくすぐる甘い香り。背中の中のシヤツごしに伝わる人の温もりがそこにマリアの存在を伝えていた。

たいして広いベッドではない。人が二人横になればそれでいっぱいっばいだ。今も大神の背中にはマリアの体が密着している。そんな状態で何事もなく一晩が過ごせるほど大神も己の自制心に自信を持ってなかった。

「もういい!!俺が床に寝るから!」

たまらずに叫んで身を乗り出した大神をマリアの手が制止する。

「ダメよ」

そう言っつて見上げてくるマリアの目を真上から見下ろして大神はそのあまりの美しさに息をのんだ。

むき出しになった肩の柔らかな優しいラインが、その艶やかな肌の白さが、大神にめまいにも似た感覚を引き起こす。

彼女の唇に口づけて、その首筋に、胸元に顔を埋め、その全てを

自分のものにしたという激しい衝動に大神は歯を食いしばり、耐えた。それは体中の自制心を総動員してすらも難しいことではあったけれど。

彼女からわずかに目をそらし、大神はうめくような声を絞り出す。

「いいかい。君は女で、俺は男なんだよ？」

そして、大神はマリアを見た。マリアは、いつもの彼女と少しも変わらぬ涼しい眼差しで大神を見上げている。そんな彼女の眼差しが、大神を何とも思っていない彼女の心の現れのように思えてとても、辛かった。

「それがどういうことか、分かるだろう？」

マリアは答えない。ただ静かに澄んだその瞳が大神だけを見ていた。

自分の、少し乱れた呼吸の音が、耳にやけに大きく響いて聞こえた。そしてそれに相反するように響く、少女の密やかな息づかいも。

「…どうするつもり？私を…抱きたいの？」

不意に彼女が口を開いた。どこまでも真っ直ぐに、投げつけられた言葉。

大神は息をのみ、言葉を失った。

彼女の言葉に応えなければと思う。違う、と。そんなつもりじゃないんだ、と。だが混乱しきった頭はそんな簡単な言葉さえも導き出すことが出来ずー大神はただ沈黙する。魅入られたように、マリアの瞳を見つめたままー。

そんな無言の時間に、マリアは何を思ったのだろう。

「……あなたの好きに、すればいい」

しばらくして彼女の唇が紡いだのはそんな言葉。素っ気なく、どこか投げやりな、そんなー。

そして彼女は目を閉じた。まるで全てを諦めてしまったかのよう。少なくとも大神の目にはそう映って見えた。

訳の分からない悲しみが胸をふさいでいくのが分かる。どうしようもなく悲しくて、切なくてー大神は黙って彼女に背を向けた。

出来る限り壁により、背中を丸めて目を閉じる。今は何も感じなくなかった。彼女の気配も、その息づかいさえも。

「なぜ？」

しばしの空白のあと彼女の声が大神に問いかける。

放って置いてくれーそう、叫びだしたいような衝動を、大神は拳を握り、自分の中へ押し込めた。今の自分の感情が理不尽なものであることは分かっている。彼女は何も悪くはないし、彼女の言葉に態度に、自分が勝手に傷ついて落ち込んでいるだけなのだから。きっと明日になれば普通に振る舞える。あと1時間でもーいや30分でも間をおけばなんでもなかったように彼女と向かい合えるだろう。でも、今はダメだ。とても彼女と向き合えそうもない。今の自分はきつと情けない顔をしているに違いない。そんな顔を彼女に見られたくなかった。だからー

「もう、遅い。俺も寝るから、君も、寝た方がいい」

大神はその場を濁すようにそう言った。そして自分の言葉の通りに目を閉じ、口をつぐむ。背後からはもの問いたげな気配が伝わってきたが、大神の、「これ以上何も言いたくない」そんな気持ちで敏感に感じたのかーそれ以上の問いが重ねられることなく、代わりに、

「-分かった」

そんな短い彼女の言葉が小さく大神の耳に届いたのだった。

第5章〜5〜

第5章〜5〜

しばらくして―背中越しに聞こえてきたのは彼女の静かな寝息。

大神の口元に小さな苦笑いが浮かぶ。

よほど疲れて眠かったのか、それとも大神などは眼中に入っていないだけなのか―ここまでではつきりしているといっそ清々しくらいだ。

だが、それと同時にこうも思う。彼女がこうして側に置いてくれることは、それ自体が心を許してくれている証なのかも知れないと男としては見てもらえてないのかも知れないが、そう考えるとなんだか少し嬉しくもあった。

静かに寝返りを打ち、大神は天井を見つめる。夜の沈黙がおりたこの部屋に響くのは大神のかすかな息づかいと、マリアの寝息だけ。大神は口元をかすかに微笑ませ、そつとマリアの方へ首を傾けた。暗闇に、ほのかに白く浮かぶ彼女の横顔。目を閉じ、鋭い眼差しをその奥に隠したその顔は、年相応に幼くあどけない。

優しく、優しく彼女を見つめながら、

―好きだよ。君が好きだよ、マリア

胸に満ちる苦しいまでのその思いを心の中で言葉に変える。

声に出して伝えるにはまだ勇気が足りないけれど、いつか―いつの日にか真っ直ぐに彼女の目を見て伝えられる日が来ればいいと思う。

伝わる温もりが愛しくて、切なくて―大神は息苦しいような幸福感の中、ただ壁を見つめた。

彼の長い夜は、まだまだこれからだった。

『だめ…』

そんなかな声に揺り起こされて、大神はそつと目を開けた。考え事をするうちにいつの間にか微睡んでいたらしい。まだ眠り足りないと訴える瞼をこじ開け、色気も眠気には勝てなかったかと苦笑い。薄明るい部屋は、もうすぐ夜明けなのだ、そのことを伝えていた。

『行かないで…お願い…』

再び背後から聞こえる声。全く理解不能なその響きに首を傾げ、だがすぐにそれが彼女の母国ーロシアの言葉だと言うことに気がついた。

ーロシアでの夢を見ているのか…？

多分そうなのだろう。だが、その夢が決して楽しいものでないことも分かる。言葉の意味は分からないものの、それでも彼女の声の響きは楽しそうでも幸せそうでもなくーそれは酷く切なく悲しそうな響きを大神の耳へ伝えていた。

『だめ…いけない…。行ったらあなたは…』

その言葉の内容を理解できないことがもどかしくて仕方なかった。大神は背を向けたままで考える。起こした方がいいのか、それともこのままそつとして置いた方がいいのかー

そんな時、ひとときわ高く彼女の声が狭い部屋の中に響いた。

『お願い。死なないで…。そばにいて…ユーリー…』

ユーリー。その名前には覚えがあった。

彼はマリアがロシアにいた頃の隊長であり、彼女が心からの信頼を捧げ、そしてーたぶん彼女が生まれて初めて愛した男。その彼女、マリアの見るその目の前で真っ白の雪にその命を散らしたことは、いつだったかマリア本人の口から直接聞いて知っていた。彼女が随分と長い間、その瞬間の幻影に悩まされ続けていたことも。

だから、瞬間的に大神は悟っていた。彼女がその時の悪夢を夢に見ていること。今まさに彼が死に至ろうとするその時の映像が彼女の目の前で再び繰り返されようとしていることをー

そんなことはさせられない、そう思った。

なんのためらいもなくマリアの方を向き、大神は震える彼女の肩を腕の中に抱きしめる。

愛する人を失う恐怖にこわばった少女の体を何とかしてあげたくて、さらさらの金髪をぎこちなく撫で下ろしながら、大神はその耳元に何度も何度もささやいた。

大丈夫だよ…安心して…俺はここにいるよ…ずっとずっと、君のそばにいるから…

その言葉がどれだけ彼女の心に届いたのかは分からない。だが、ゆっくり、ゆっくりと彼女の体からこわばりが消えーやがては穏やかな寝息が大神にも聞こえてきた。

ほっと息をつき微笑む大神。細い体を抱きしめていた腕を解き、そのまま腕枕をして彼女の寝顔を見つめた。

涙に濡れた頬を手の平で拭い、額に触れるだけの優しいキス。

もう彼女が泣かなくて済むように…悲しい夢を見なくてもいいようにーそんな思いを込めて。

腕に感じるのは愛しい少女の重み。大神は彼女を守るようにそつと腕を回すと、再び静かに目を閉じた。

こんな状態で眠れるとは思えなかったものの、なんだかとても満ち足りた、幸せな気持ちだった。

微笑み、彼はじつと耳を澄ます。自分の鼓動と、彼女の鼓動とー心を凝らして聞き入るうちに、二つの鼓動がだんだんと重なり合っ

て聞こえる気がした。

トクン…トクン…トクン…トクン…

そんな規則的な律動が大神を眠りへと誘い込む。腕の中の愛しい存在を壊さないように、でもしっかりと抱きしめたままー大神は再び微睡みの中へと落ちていった。

第6章 1

第6章 1

幸せな、夢を見ていた。

白い雪に閉ざされた極寒の地で、私と、あの人と――
幸せだった。とても。

たとえそれがつかの間の幻にすぎなくても、それでも私は――

目が覚めたときほんの一瞬、自分がどうなっているのか、そんな
混乱の中に陥った。

目の前にあるのは一郎という青年の寝顔。本当に吐息が伝わるほ
どの距離にある彼の顔を凝視し、なぜ？――とマリアは思う。

昨日は背中合わせで眠りについたはずなのに、今、彼の腕の片方
はマリアの頭の下にあり、もう片方はそっとマリアの肩に寄せられ
ている。

どうして――マリアは再び思った。

私は夕べ、彼を怒らせたのに――

『――君は女で、俺は男だ』

昨夜彼はそう言った。そのことの意味が分かるか、とも。

もちろんそんなことくらい分かっていた。そのことの意味を理解
できないほど、マリアは子供ではなかった。

ただ不思議だった。彼の口からそんな言葉が出たことが。たぶん
その瞬間に至るまで彼を異性として明確に意識していなかった。失
礼な話だが、彼のことはまるで害のない小さな動物か子供のような
ものとして認識していなかったのだ。

マリアはわき上がる疑問をそのまま彼にぶつけた。自分を抱きた

いのか、と。決して彼を困らせたかったわけではない。ただ知りた
いと思ったのだ。

彼が自分をどんな目で見ているのか、どうしたいと思っているの
かーそのことを、知りたかっただけ。ただ、それだけのことだった。
だが、そんなマリアの意図とは裏腹に、彼はひどく困ったような、
どうしていいか分からずと惑う子供のような、なんだかとても無防
備な顔で、マリアの顔を見つめていた。

その顔を見た瞬間、マリアは不意に彼とそうなってもいいか、と
思った。つまり、彼になら抱かれてもいい、と、ほとんど突発的に
彼に恋をしているわけではなく、愛しているわけでもなくー自暴自
棄になったわけでも、もちろんない。ただごく自然に、その思いが
心に落ちてきたーそんな感じだった。

好きにすればいいー気がついたときにはそんな言葉が口について
でていた。すぐ横で聞こえた彼の息をのむ音。その眼差しが自分に
注がれているのが分かった。

傍らで、人の重みが動く気配にマリアはとっさに目を閉じた。

だが、いつまでたってもその瞬間はやってこなかった。

目を開け、傍らを見たマリアの目に映ったのは、頑なに全てを拒
むような、そして少しだけ悲しそうなー彼の背中だった。

第6章 2

第6章 2

そうー私は彼を怒らせた…その、はずなのに…

マリアは困惑混じりの眼差しを彼の寝顔に注ぐ。そうして間近で見つめて思う。目を閉じた彼は、まるで子供みたいだと。あどけなく、邪気のない寝顔は、思いの外幼く見えた。

動いてしまえば彼を起こしてしまいそうで、マリアは身じろぎ一つ出来ずー目線だけでそつと彼の顔の輪郭をたどる。そうしてじっくり見てみると、彼が意外に整った顔立ちをしていることに気が付いた。

どうして今まで気付かなかったのだろうか、と思う。しばらく考えて、その理由に思い至った。それは、彼の瞳のせいだと。いつも…いつでも真っ直ぐに人を見る、迷いのない眼差し。彼の顔を見ると、自然とその力強い瞳に目が引き寄せられてしまうのだ。なぜか、いつのまにかー。

不思議な人…マリアは思う。

まだ出会ったばかりだというのに、こんなにも彼に対する警戒心が無いのはどうしてだろう？

あの人に似ているから？ - たぶん、それもあるだろう。でもそれだけではない、そんな気がする。

もしかしたら彼の瞳がーいつも優しく、慈しむように見つめてくれるその瞳が、冷たく凍えるマリアの心をそつと包み込んで温めてくれているから、なのかも知れない。

マリアは大神の顔を見つめた。静かに、だが、強い思いを込めて。不意に、彼が身じろぎをする。カーテンの生地を通しても明るく差し込む朝日に眠りを妨げられたのだろう。眠り足りなそうに、の

ろろと開いた瞼の下から漆黒の瞳が現れる。

その瞳がすぐ目の前にあるマリアの顔を認め、嬉しそうに細められた。

「ほら、ね？」

まだ半分くらいは寝たままなのだろう。いかにも眠そうな、舌っ足らずな口調で、彼は言葉を紡ぐ。

「俺は、ここにいるだろう？」

ふわりと微笑んで、彼はマリアを抱く腕に力を込めた。

「約束したんだ…。俺は…ずっと…君の、側に…」

言いながら、彼は再び微睡みの中へと戻っていく。彼の言葉が、昨夜見た夢の中、あの人が口にした言葉と重なった。

微笑み、眠る彼の顔を、マリアは泣きたいような思いで見つめた。そして、彼だったのかーと思う。

あの、幸せな夢を見せてくれたのは、彼だったのかーと。

彼の腕が、その胸が暖かだー切ない胸の痛み息が詰まる。それは昔誰かがくれたもの。父が、母が、そしてあの人だー。

マリアはぎゅっと目を閉じる。そうやって全ての痛みをやり過してしまおうとするかのように。

静かに冴えた意識のまま、マリアは男の胸に顔を埋める。男に気付かれないように、その眠りを覚まさないようにーマリアは涙を流さずに泣く。

逃げても逃げて、結局は逃れきれない、苦しくも愛おしい、切ない思いを抱き続けたままで…

第6章 3

第6章 3

町に行こうーそう言いだしたのは彼の方だった。

朝食とも昼食ともつかない食事を終え、太陽も中天をこえた、昼下がりのことである。

君のいる場所をいろいろと見てみたいんだー彼はそんなふうに言った。だから、どこか行ってみたい場所があるのかと思ひ尋ねてみれば、どうやらそうでもないらしい。

観光名所が見たいわけじゃないんだー彼が言う。

俺が見たいのは君の生活している場所。良く買い物に行くところやお気に入りのカフェ、行きつけのバーや…とにかくそんな所なのだ、と。

変わっているーそう言ってやると彼ははにかんで、

「ただ、君のことをもつと知りたいだけだよ」

そう、照れくさそうに笑うのだった。

ニューヨークの町並みは相変わらず人であふれていた。

どこに行こうか悩んだあげく、マリアが選んだのは良く行くショッピングモール。そこは洋服の店から食材屋、少し細い路地に入り込めば銃を扱う店まで、いろいろな店が雑多に集まる、マリアの行きつけの場所であった。

まあ、何が欲しいというわけでもないが、そういう場所に行きたいというのだから仕方あるまい。仕事と買い物以外ほとんど言っていないほど部屋にこもりきりのマリアには、彼を案内できるほどの場所などたいしてありはしないのだから。

夕食の買い物でもししながら案内すればいいーそんなふうに考えな

がらマリアは彼を連れてモールのメインストリートを歩いていた。
そんな時だった。

買い物も終え、両腕に荷物を抱えてにこにこしながら歩いていた
彼が急に足を止めた。その目がある一点を見つめたまま動かない。
何事かと思い彼の視線を追ってみると、そこにあつたのは小さな花
屋がただ一軒。ふけば飛んでしまいそうな古い店先には、それでも
色とりどりの美しい花々があふれかえっていた。

「あの、白い花……」
ぼつりと彼が呟いた。

白い花？ マリアは様々な色の中に白を探して目を凝らす。その
花はすぐに見つかった。大輪の、純白の花を咲かせるそれは――

「カサブランカ、ね」

「カサブランカ？」

「あの花の名前よ」

「そう、か……あの花の名前か」

そう言ったきり、大神は不思議なくらい熱心にその花を見つめて
いた。しばらく黙って彼の横顔を見つめていたが、あまりに長くそ
うしているのでさすがに声をかけようとしたとき、不意に口を開い
た彼が、

「いつだったかな……。俺、あれと同じ花を見たことがあるよ」

呟くようにそう言った。なんだかとても、懐かしそうな口調で。

「綺麗な花だって思った。とても綺麗な……。その時思ったんだ。

君に――」

言いながら振り向いた彼は、じっと自分を見つめるマリアに気付
き、不意をつかれたような顔をして、それから少し、照れくさそう
に笑った。

「私に……なに？」

途中で止まった言葉の先が気になって尋ねると、彼はひどくうる
たえたように顔を背けてしまう。怒っているわけではないと思う。
その証拠に、彼の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

例の花を横目でちらつと見て、マリアは彼に一つの提案をする。

「欲しいのなら、買ってもいいけど？」

「えっ？」

一瞬、何を言われているのか分からなかったらしい。間の抜けた顔で聞き返す彼に、マリアは目線だけで彼のお気に入りを示して見せた。

「どうする？買うの？」

重ねて尋ねた。花の一本や二本、大した出費ではない。彼が欲しいというなら買ってほしいような気がしたのだ。

だが、マリアの申し出に対し、彼は首を縦には振らなかった。彼はゆるゆると首を横に振ると、ありがとうと、マリアに微笑んだ。そのあまりに屈託のない笑顔に、己の意に反して頬が熱くなるのを感じた。それを彼に悟られたくなくて、マリアは慌てて彼から顔を逸らし、歩き出す。彼をその場に残したまま。

待ってよ、マリアー後ろから彼の声。マリアはそんな彼の声に耳を貸さずに、だんだんと多くなってきた人並みをすり抜けるようにして歩き続ける。

しばらくそうして歩き続け、マリアはふと足を止めた。さっきまで聞こえていた彼の声が聞こえないのだ。しまったと思い周囲を見回すが、あの漆黒の髪はどこにも見あたらない。

マリアは息を一つつき、軽い自己嫌悪に視線を地面に落とす。あの黒髪の青年という自分はいつになく感情的だ。

私らしくないーそんなふうに思う。本来の自分はこのではないはずなのに、と。彼といると調子が狂う。彼といると、昔の自分を思い出すのだ。人の背に守られてぬくぬくと生き続けていた自分ーそんな自分になど、もう、戻りたくないのに…

守られることになれて、自分の一番大切なものさえ守りきれないようなーそんな人生はもう二度と繰り返したくなかった。

だから、強くなるうと思っただのだ。一人で立ち、誰の助けが無く

とも生きていけるくらい強く、強くー。

「マリアー」

名前を呼ばれ、顔を上げるとそこには、思わずこちらがほっとするよつな、そんな笑顔を浮かべた彼の顔。

ほら、やっぱり…

途方に暮れたよつな思いでマリアは彼を見つめる。

彼がこうして笑うだけで心が温かい。今まで頑なに築きあげてきた心の壁を端から突き崩されていくよつな気持ちさえする。

なぜ、彼なんだろうーマリアは思う。まだ出会って、ほんのわずかに時間しかたっていない、赤の他人と言ってもいい間柄でしかないのに。

根が生真面目なせいか、そんなふうを考え込んでしまう。だが、思い悩むマリアのことなど大神はまるでお構いなしだ。

大きな手の平でマリアの手を取り、にっこりと笑う。

「手をつないで帰ろうか？マリア」

凍えた手を包み込む暖かな温もりにマリアはそっと視線を落とし、それからことさらに冷たい声を作って問いかける。

「なぜ？」

しかし、大神はまるで動じない。鈍感なのか、脳天気なのか、はたまた大した大物なのかー大の男も追い払うマリアの眼差しも、冷たい声音も当の彼にはちつとも通じないようだった。

「だって、迷子になったら大変だろう？」

しれっと答える彼に、マリアはなんだか頭を抱えてしまいたいよつな気持ちにさせられる。

それはあなたの方でしょうーそう返すと、またもや彼は、平気な顔で答えてくれるのだ。

「そつだよ。だから、手をつなぐんだ。俺が迷子にならないように、ね」

ーよく分かってるじゃないか、マリア

そんな小憎らしいセリフでも、にっこり邪気の無い笑顔と対にな

つっていると、不思議と腹も立ってこない。答えに窮するマリアの沈黙を了解と受け取ったのか、大神は嬉しそうに歩き出す。もちろんマリアの手をしっかりと握ったままで、だ。

早くもなく、遅くもなく、半歩先をゆく大神は、人々の流れからマリアを守るように歩いている。それがごく当然のことであるように、自然と、まるで嫌みを感じさせることなく。

マリアは少しうつむいて、彼の半歩後ろを歩いていく。左手を彼の手の平に包まれたまま、彼の温もりをその手に感じながら、ゆっくり、ゆっくりと。

そんな二人の背を赤く染め上げるように日が、静かに沈んでいくとしていた

第7章 1

第7章 1

夜の酒場は酒と煙草の匂いと男達の喧噪にあふれていた。

扉の向こうの異空間に、ほんの一瞬足を止めた大神の横をすり抜けるようにして、少女はまるで臆することなく足を踏み入れる。そんな彼女を大神は驚き混じりの眼差しで見つめ、それから思い直すように小さく首を振った。

ここは酒場だ。決して彼女のような年齢の少女が出入りしている場所ではなく、慣れ親しむべき場所でもない。だが、それでも、こもまた彼女の生活の一部なのだということを、大神は思った。

彼女の背が、扉の向こうへ消える。振り返ることなく消えたその背を追うように、大神もまた暗い店の中へと足を踏み入れた。

とたんに突き刺さるたくさんの眼差し。

薄暗い店内を見回し、軽く目を見張る。

店中の男達がマリアと大神を見ていた。彼らはまず苛立ちと確かな畏怖を込めた視線をマリアへと注ぎ、それから大神の方へと目を向ける。瞳に浮かぶ興味深そうな、訝しげな光を隠そうともせず、そんな眼差しを大神は戸惑いながらも真っ直ぐに受け止めた。彼らを見返すその瞳はどこまでもひたむきで強い輝きに満ちている。

迷いなく返される眼差しに、今度は荒れくれ男共が戸惑う番だ。彼らは一様に面食らったような顔をして、それからばつが悪そうに目を逸らす。そして手に持つグラスの中身を再びあおり始めるのだ。つた。

そんな彼らを不思議そうな顔で見回していた大神を、少し先でマリアが呼ぶ。慌てて駆け寄る大神を待ち、彼女はカウンターの向こうの初老の男性に早口の英語で話しかけた。

気むずかしそうなその男性は、上から下へとじろじろと大神を眺め、それからむつつりと小さく頷いた。マリアが再び彼に何かを話しかけ、彼もまたマリアに何事か答えている。早口で交わされる言葉は、大神にはちんぷんかんぷんで、だが、それでも何とか二人の会話を聞き取るうと耳をこらしていると、不意にマリアが大神の方へ向き直って話しかけてきた。もちろん今度は日本語で。

「雑用係としてなら使ってもいいと言ってるわ。英語は分かるわね？」

「ああ。なんとかね。あまり早口でなければちゃんと聞き取れると思う。話す方も日常会話程度なら大丈夫だよ」

「そう……。じゃあ、私は隅のテーブルにいるわ。何かあったら声をかけて。あとのことはマスターが指示してくれるから」

そう言うのが早いか、彼女は大神をその場に残して店の片隅の定位置へと行ってしまった。

大神は彼女の背を見送り、それからカウンターの向こうからじつとこちらを見ているマスターの方へ向きを変え、小さく頭を下げた。

『一郎といいます。よろしく願います』

『ま、せいぜい頑張んな。うちの客は気性が荒いのばかりだ。なめられんようにするんだな』

そんな言葉に神妙に頷く大神を見て、強面のマスターはにやりと笑う。そして、まずは皿洗いからだ、大神をカウンターの内側へと招き入れた。

欲しいものが出来た。

誰かに買ってもらったのでは意味がない。自分の金で買ってこそ意味のあるー。

仕事をしたいといったとき、マリアは決しい顔はしなかった。強い口調で反対されたが、それでも大神は退かなかった。

最後には、結局頷いてくれたマリアー。彼女が大神のためを思ってくれているのだと言うことはよく分かっている。

優しいマリアー。

その瞳が大神を案じてかすかに曇っていた。

彼女を心配させているーその事実胸が痛む。心配させたいわけではないのだ。

ただ、彼女の笑顔が見たい。

君がほんの少し微笑んでくれるだけで、たとえようもないくらい幸せになれる自分がいる。

自己満足だ。ただの。そんなこと分かっている。

それでもーそれでも、俺は…

第7章 2

第7章 2

彼が何を考えているのか、さっぱり分からない。マリアは思う。まだ十分に回復していない、熱も下がりがきつていないような体だ。というのに、いきなり仕事をしたいと言いつ出すのはどういうことなのだろう？ 駄目だと言っても聞きもしない。どこまでも頑固な態度の青年の様子を思い出すたび、マリアはこみ上げる吐息を押さえることが出来ずにいる。

普段はまるでそんな感じはしないのに。マリアは働く大神の姿を見つめた。

最初はカウンターの向こうでせつせと洗い物をしていたが、それも一段落したのだろう。今はフロアにでて男達の合間を縫うようにしながら給仕をつとめている。

最初こそは慣れない仕事に手間取っていたようだが、もうだいぶなじんできたようだ。つたない英語を操りながらも絶やさぬ笑顔で仕事をこなしている。

そんな彼はいかにも人が良さそうで、マリアの前で見せた頑固なその一面をまるで感じさせない。

元氣そうに見えるが、それでもやはり体調が良くないことは、マリアの目には一目瞭然だ。頬は上気して、隠そうとしてはいるものの、もうすでに息が荒くなっているのが分かる。注意深く見ていると、足下もふらつきがちだ。熱がぶり返してきたのだろう。

少し休ませた方がいいだろうか？ マリアは考える。少し考えたあと、やはりそうした方がいいだろうと、席を立ち、働く大神に声をかけようとした。

だが、マリアが声を上げるよりも先に、大神を呼ぶ者がいた。

どこか聞き覚えのある声につられて視線を動かした先にお調子者のアメリカ人の姿を見つけ、軽く目を見張る。

呼ばれた大神が、素直に彼の元へ向かうのが目に入った。

どうしようかー瞬考え、苦笑する。

今の自分はまるで無防備な子供を持つ過保護な母親のようだ。それに、呼び止めようにも、客に呼ばれたボーイを引き止めるほどの理由があるわけでもない。

マリアは再び椅子に座り直しながら、少し気がかりそうな眼差しで、静かに大神の背を見送った。

第7章〜3〜

第7章〜3〜

彼はずっとその青年の様子を観察していた。見るからに人の良さそうな青年である。黒髪に黒い瞳のその男は、今まさに彼ーボードウィルの目の前に立っていた。

驚きもせず、ボードウィルは青年の顔を見上げた。それも当然のことである。何しろ、彼を呼びつけたのは他でもない、ボードウィル自身であったのだから。

『ご注文ですか？』

バカ丁寧な英語で尋ねる青年を、ボードウィルは無遠慮にまじまじと見つめる。それからちらりと店の片隅の MARIA へと視線を走らせ、彼女の冷たい眼差しに向かい討たれて小さくため息。

ーそんな食いつきそうな怖い目で見なくても別にしてもしねえさ…
心の中で、そんなふうにはやいてみる。

MARIA 自身にはまるで自覚がないに違いない。自分がどんなに心配そうな目で、この黒髪の青年を見ているのか。そして、夢にも思っていないだろう。そんな彼女の様子に気付いている男がここにいることなど。

やるせない思いでもう一度ため息をつく。

全くやっていられない。自分の方が先に MARIA に惚れていたのだ。それなのに、ひょいと突然現れた男に惚れた女をとられてしまうなんて。

恋愛ごとを早い者勝ちだなんて主張するつもりは更々ない。だが嘆きたくもなるといふものだ。自分は何ヶ月もかけて、それでも彼女の笑顔一つ引き出すことすら出来ないでいたというのに、目の前にいるこの男はあつという間に MARIA の閉ざされた心の透き間に入

り込んでしまったのだ。

別に、二人の間に特に親密な空気を感じたとか、そう言うわけではない。だが、彼女の目を見れば分かる。その美しい翡翠色の瞳が、彼のことを心配でたまらないと言っていた。彼女を初めてみた日から今日まで、そんなふうに関係をあらわにするその瞳を目にするのは初めてのことだった。

だから思わずにはいられない。天におられる主はなんと不公平なのかと。全ての人類が平等だなんてみんな嘘っぱちだぜー彼は心の底からそう思った。

『つたく、マリアも涼しい顔してよく言うぜ。犬っころを拾ったなんてさ。子犬って言うにやあ、随分大きな拾いものじゃねえか…』
口をつけてるのはそんな愚痴のような呟きだ。小さな声で、しかも早口だったものだから聞き取れなかったのだろう。その黒い瞳を瞬かせ、聞き返そうとした青年の先を征するようにして、

『あんた、名前は？』

短く問いを投げつける。不機嫌そうな表情を隠そうともせず。

だが、そんなことは全く気にした様子もなく、青年は生真面目な英語で、その問いに答える。その声は、耳をふさいでしまいたくなるほどの騒がしさの中、不思議なくらい鮮明にボードウィルの耳へと響いた。

『一郎といいます』

そう言つて、彼はにこりと笑う。

いい笑い顔だなと、素直にそう感じた。濁りのない、真っ直ぐな笑顔だと。見る人の心を不思議と和ませるような、胸が暖かくなるようなー

オレには出来ねえよな、こんな顔は…そんなふうには思いつながら再びマリアの方を盗み見る。マリアは気がつかない。ただ、一途な眼差しで、この一郎という青年の背中をじっと見つめていた。

なんて目をしてるんだよ…お前らしくもないー再びこみ上げた吐息を飲み込んでそつと天を仰ぐ。それからゆっくり視線を戻し、目

の前の青年の顔を見上げた。ひるむことなく見返してくる澄んだ眼差しに、ボードウィルは思う。マリアはこいつの屈託のない笑顔や、こんな真っ直ぐな目に惚れちまったのかもなーそんなふうに。

『あんた、マリアとはどういう関係なんだ？』

唇をとがらせ尋ねた。その質問は彼にとって、よほど不意をつくような問いかけだったのだろう。

『マリア…と？』

きよとんとまん丸い目をしてそう言うと、彼はしばし下を向いて考え込んでしまう。その唇が開きかけ、また閉じてーそして、

『彼女は、恩人です。俺の。怪我をした俺を助けてくれた』

彼の口からでたのはそんな当たり障りのない言葉。嘘をつけとばかりに見上げたボードウィルの目の前で、二つの黒い瞳がそっとマリアの方を見た。そこでやっと、自分の方を心配そうに見守る彼女に気がついたのだろう。彼は何とも言えない表情をその面に浮かべ、そして微笑んだ。幸せそうーだが、見ているこちらの胸が痛くなるような隠しきれない切なさや奥にひそめた、そんな顔をして。

そんな青年の横顔を、ボードウィルは頭をかきむしりたいような心境で見つめた。放っておけばいいのだと、理性ではそう考える。

だがその反面で思うのだ。あんな顔見せられて放っておけるか、と。

『つたく、なんだってオレって奴は…』

思わず口をついてでたのはそんな言葉。吐息と共に青年の顔を見上げると、彼は少し首を傾げボードウィルの方を見ていた。その様子はまるで無防備で、マリアがこの青年を捕まえて子犬と表した意味が、何となく分かった気がした。

しょうがねえなあーボードウィルはかすかな苦みをはらんだ笑みを、その口元に浮かべる。もともと俺は犬・猫・子供、ついでに可愛い姉ちゃんにはめっぼう弱いんだーそんなことを思いながら。

『おい、お前…一郎だったか？』

『はい』

『ちよっとここに座ってな』

『え…？』

言うが早いか、立ち上がると、無理矢理のように一郎―大神を椅子に座らせ、まるで子供にするように手の平でその頭を二度、軽くたたく。そして、面食らった大神が目を白黒させている間にテーブルとカウンターの間を一往復。戻ってきた彼の手には冷えたビールが二本、ちゃんと握られていた。

『ほら、飲めよ』

そう言つて、二本のうち的一本を、彼は当然のことのように大神の方へと差し出した。一方大神は、困ったような顔をしてそれに答える。何しろ、まだ仕事の最中なのだ。さすがにアルコールを摂るわけにはいかないだろう。

『俺はまだ仕事がありますから…』

結構です―そう言つて断ろうとしたその言葉を、ボードウィルの声が遮り、

『平気だつて。ボスにはちゃんと許可をもらつてきたんだ』

そう言つてニツと笑う。とっさに振り向いた大神は、その視線の先でマスターがやれやれとばかりに肩をすくめるのはつきりと見た。

怒っているわけではない、とは思つ、たぶん…。きっと、ただ単に呆れているだけなのだろう。大神は何とも言えない表情をして再びボードウィルの方へと向き直る。彼は―

『な、平気だろ？』

言いながら、まるで悪気のない顔で笑つた。そして大神の手を取ると、強引にビールの瓶を握らせた。

断らなければならないと思う。思うのだが…自他共に認めるお人好しの大神である。強く押されるとどうしてももうまく嫌だと言い出せない。しかも、相手に悪気がないとなれば尚更のこと。

そして案の定、断ることの出来なかった大神は、ボードウィルと差し向かいで酒を酌み交わすこととなつてしまったのである。

第7章 4

第7章 4

ほんと、人のいい兄ちゃんだなあーとはボードウィルが。

なんだか憎めない人だよなーはもちろん大神が思ったことである。二人は酒を飲みながら、いろいろなことを話した。

お互いのことーちよつとした身の上話や、それからマリアの話も。ボードウィルは、彼の知るマリアのことを大神に語ってくれた。アメリカに来てからの、彼女のこと。

『最初見たときは、怖いくらいに綺麗な顔した女だって、ただ単純にそう思った』

彼は懐かしそうに目を細めながら言った。

『だけど正直、綺麗だけど関わり合いにはなりたくないと思ったね。この女はやばいって感じたからな。氷みたいな冷たい目をして、いつもどこか遠くを見てた』

『それなのにどうして…？』

尋ねた大神を見て、ボードウィルは小さく笑う。

『一体どうしておれがマリアに惚れたのかって、言いたいんだろっ？』

その言葉に、大神が小さく頷く。二つの黒い瞳が真面目な輝きを宿して真っ直ぐにボードウィルを見ていた。

そんな彼を見ながらボードウィルは気が付いている。いつの間にか自分が、この目の前の青年に確かな好意を抱きはじめているーその事実。

ボードウィルは、そうだなあーと考えるように天井を見上げる。そして、

『なんだかよ、ほっとけねえなって、思っちゃまったんだよなあ』

言いながら、少し照れくさそうに笑った。酒の力も手伝ってか、彼は小さな声でそつと大神に話してくれた。マリアには内緒だぜ？
- そんなふう言いながら。

『今にも凍えちまいそうで、見てられなかったんだよ。あいつがあんまりに一人すぎて、どうにかなつちまうんじゃないかって、思った。つい目が離せなくて目で追っかけているうちに、いつのまにかさ…』

惚れちまってたーそう言って彼は、子供みたいな顔をして笑った。大神はそんな彼をまぶしそうに見る。

彼は自分と同じだーそんな風に思う。自分もそうだったのだ。最初は彼女の厳しいまなざしに戸惑いと不安を覚えたものだ。自分は彼女とうまくやっていけるのかー彼女に認めてもらえるのか…と。だが、ともに戦い、同じ時間を過ごすうちに、その思いは少しずつ変化していった。そうして気が付いた時には彼女を誰よりも大切に思うようになっていた。

愛しくて、愛しくて、愛しくて…彼女の笑顔を見るだけで幸せな気持ちになれる。こんな想いを、一体どんな言葉にしたらいいのかきつと言葉になどできない。きつと…

『お前はどんなんだ？』

『えっ…』

ふいに問われ、現実へと引き戻された大神は、顔を上げて目の前の男の顔を見た。

『オレにはっかかり話させないでお前も言えよ。一郎、お前はどうか思ってるんだ？』

『どうって…何を？』

いまいち質問の意味がつかみきれずに問い返す彼を見ながら、やれやれとばかりに肩をすくめるボードウィル。

『何とぼけてんだよ。マリアのことさ。決まってるだろ』

やつとのこと何を問われていたのかに気が付き、大神は軽く目を見張って目の前の男を見た。彼の顔に浮かぶのは何もかも承知だ

といわんばかりの人の悪い笑み。だが、その瞳だけは妙に真剣に、大神の顔を見つめていた。

一瞬、考えるように上を向く。ボードウィルは、黙って大神の答えを待っている。周囲の喧噪が、なんだか遠のいたような、そんな気がした。

『…マリアは…マリアは俺にとって、とても大切な人だよ。この世界の誰よりも、幸せでいてもらいたい人だ』

一言、一言噛み締めるように―だが、一息にそう言い終えてから、大神は喉がひどく渴いていることに気が付いた。

きつと、緊張したせいだろう。のびした手にグラスを取り、それを一気に飲み干した。

『幸せでいてもらいたい人？幸せにしたい人の間違いじゃないのか？』

からかうようにボードウィル。そんな彼に、大神は微笑を返し―

『出来ることなら、俺の手で幸せにしたいと思う。でも、結局それは俺のエゴなんだ。彼女が幸せであればいい。たとえ彼女が俺以外の誰かの隣にあったとしても、彼女が笑っていられるのなら、それでいいと思うんだよ』

なんて、ただの強がりかもしれないけどね―大神は言った。そして再び、彼の黒い瞳は愛しい人の姿を求めるように店の奥を彷徨った。

どこまでもひたむきで真摯な眼差し。

―きつとこいつなら、そうするんだろうな。

ボードウィルは思う。強がり―そんな風に言っただけだけれど、彼の思いに、言葉に嘘は無い。そのことは、痛いくらいにボードウィルの心にも伝わった。

『そうか―』

頷いて、大神のグラスにビールを注いだ。飲もうぜ？―そう言うのと、大神も頷き、グラスを取る。なんだかとても酒を飲みたい―そんな気分だった。

第7章 5

第7章 5

朝が近付き、男達の馬鹿騒ぎの喧噪も遠のいた頃、ようやく酒場の営業終了の時間になった。

少し前からカウンターの向こうで片づけを始めていたマスターが手を休め、マリアを呼んだ。

ゆっくりと、彼の前に立つと、いつものごとく差し出される一晩の報酬。小さく頷き、それを受け取ると中身を確認した。

『確かに』

呟くようにそう言って、マリアはそれをコートのポケットへ無造作に仕舞いこんだ。

『いや、あんたが居てくれて助かってるからな。今晚も頼む』

『…ああ』

『あと、こいつはー』

言いながら、彼は上着の隠しからもう一つの袋を取り出した。それをマリアの方へ突き出しながら、あご先で店の中央のテーブルを示す。そこには男が二人、突っ伏すようにして酔いつぶれていた。二人とも、マリアの知る人物だった。

『こいつはあの兄ちゃんの分だ。後半は役立たずだったが、前半は、まあ、それなりに頑張ってたからな。明日も気が向いたら雇ってやると伝えといてくれ』

珍しく、にやりと相好を崩したしわ深い顔を見ながら、分かったーと短く答える。そしてそのまま、眠る大神のもとへと行きかけたが、ふと思いついたように足を止めると、

『ボードウィルはどうする?』

そう尋ねていた。

『あのお調子者か。あいつは、まあ、いつものことだからな。適当にその辺にでも転がしとくさ。起きたら勝手に出ていくだろう』

『そうかー』

マリアは頷き、

『それなら、私たちは先に帰る。片づけは手伝えないが…悪いな』
そんな、今までの彼女であれば決して言っていないかっただであろう言葉を口にした。店主は少し驚いたような顔をしてマリアを見たが、すぐにその口元を笑いの形に歪めると、

『そんなことは気にせんでもいいさ。あんたの仕事に片づけ仕事までは含まれてないからな』

それよりも、あいつの面倒を見てやんなー優しげに目を細めた店主に頷き、マリアは大神のところへと向かう。耳元で声をかけると彼はうつすらと目を開き、マリアの顔を見た。うれしそうにほころぶ顔。

『マリアー』

彼はこの上も無く幸せそうに、その名前を唇にのせた。

『…帰るわよ』

そう言つと、彼は、

『うん、分かった』

そう答え、たよらない仕草でテーブルに手をつけて、どうにかこうにか立ち上がる。だが、酔いの抜けないその体は、いかにも危なげで、マリアは彼の腰に腕をまわすようにしてその体を支えた。

ドアを開ける。夜の世界から、明るく白みはじめた朝の世界へ。

ほんの少し、まぶしそうにその瞳を細め、マリアはゆっくり、ゆっくり歩いた。肩にかかる重みと、その息づかいと…心にかかるというほどでなく、かといってまるで気にならないわけでもない。不思議な違和感―。

まだ朝も明けきらない、そんな時間。当然のことながら人影などほとんど無く―かすかな朝日に照らされる道に、マリアと大神、二人の影だけがほのかに揺れていた。

第8章 1

第8章 1

その日、大神一郎の朝の目覚めは、決して心地よいものとは言えなかった。

目を開けて、閉じて、また目を開ける。眠いわけではなかったが、何とはなしに体がだるい。カーテン越しの光がやけに眩しく感じられ、大神はそつと目を細めた。

ゆっくり、そろそろと体を起こすと、頭を襲う鈍い鈍痛。のどの渇きも堪え難く、何の言い訳もしょうの無い、完璧な二日酔いだっ
た。

とにかく水を飲もうーそう思ってベッドを降りようとした大神は、そこで初めてベッドに寄りかかるようにして眠る少女の姿に気が付いた。彼女は毛布一枚にくるまって丸くなっている。

大神は一瞬困ったような顔をして、それから黒い瞳を優しく細め、彼女の傍らに膝をついた。

「マリアー」

顔を覗き込み、彼女の名を呼ぶ。よほど疲れているのか、彼女は大神の声にもまるで反応せず眠っている。揺り起こしてしまうのは、あまりに忍びなかった。

腕をのばし、抱き上げる。彼女の眠りを妨げないように、静かに優しくー

眠る少女をベッドの上に降ろし、しばしその寝顔を見つめてから、足音を殺すようにしてキッチンへ向かう。その背を、涼やかな声が追いかけた。

「一郎…?」

まだ眠気の抜けきらない、ほんの少しだけ甘い響きを残すその声

を耳にした瞬間、胸の鼓動が大きくなる。

振り向く前に、深呼吸を一つ。心を落ち着かせ、ゆっくりと振り向いた。

体に毛布をまわりつかせたまま、半身を起こした彼女は、その翡翠の瞳を大神の方へ向けている。彼女の瞳を黒曜石の瞳で見返して、大神は微笑んだ。

「おはよう、マリアー」

「…ええ」

不機嫌そうな声。彼女はまだまだ眠そうだ。

「ごめん。起こしちゃったみたいだね」

「別に、そんなこと無いけど…それより、これ」

言いながら、彼女は右手を差し出した。その手の平の中に何か握られている。受け取るうと出した大神の手の上に、小さな袋が音をたてて落ちた。耳に聞こえたのは、金属と金属が触れあう音。

「なんだろう？―首を傾げる大神にマリアが言う。」

「あなたの分よ。昨日あなたに渡すようにマスターに頼まれたの袋を開け、中をのぞいてみた。そこには数種類の硬貨が混じりあって入っている。大神はまるで子供のよう目を見輝かせた。マリアを見る。」

ありがとう、マリアーそう言うと、彼女はちょっとだけ困ったような顔をして、それから少し、その口元をほころばせた。そんなマリアを見て、大神もまた、嬉しそうに微笑む。そして言った。

「もう少し眠るといいよ、マリア。食事の準備は俺がするから」

「大丈夫よ。もう起きるわ」

そう言って起き上がるうとするマリアを押しとどめるように、大神はその傍らに膝をつく。彼女の顔を覗き込み、

「いいから眠って。疲れが溜まってるはずだ。俺が、大分世話をかけたからね」

優しく、目を細めた。

マリアはそんな大神を見つめ、それから意外なほど素直に再び横

になる。毛布をその肩口まで引き上げてやり、大神は少女の額にそっと手の平を乗せた。触れたその部分が、少し熱いような気がする。のは気のせいだろうか？

柔らかな、絹糸のような髪にそっと指を滑らせながら、ゆっくり、ゆっくり言葉を継ぐ。

「眠って、マリア。君が目覚ます頃には、おいしい食事の準備をしておくからー」

低く、どこまでも穏やかに響くその声に眠気を誘われたように、マリアは目を閉じる。

泥のように体が重かった。確かに疲れているのだろう。普段なら、こんなことは無いのにー。

一郎の声は不思議だー半分眠りながらそんなことを思う。彼の声を聞くとても心が落ち着く。彼の声は、とても…心地いい…

いつの間にか、少女はかすかな寝息を立てていた。大神は微笑んでその寝顔を見つめた。

ー穏やかな時間が過ぎる。

幸せだった。ずっと、こうやって、彼女のことを見守って生きていけたらどんなにいいだろう。だが、大神はこの時代の人間では無い。いずれ、彼女の目の前から消えてしまっーそんな存在かもしれないのだ。

紅蘭は言った。

時間旅行の期限は、五日前後がせいぜいだろうーと。

この時代にきて今日で三日目…。明日か、明後日か…自分は消えてなくなってしまうのかもしれない。この時代の時間軸の中から。

「マリア…」

大神は少女の名を呼ぶ。何よりも愛おしい名だ。

「…マリア」

もう一度、その名を呼んだ。密やかに、だが想いを込めて。

朝の澄んだ空気の中、愛しい少女に触れることもせず、大神はただその寝顔を見つめていた。何にもかえがたいほどの幸福と付き

まとう切なさを、胸に確かに抱いたままで。

第8章 2

第8章 2

その白い花は、小さな花屋の古ぼけた屋根の下で、今日も美しくその花を咲かせていた。

見つめながら、大神は一人の少女を思う。

この時代の彼女。そして、遠い帝都の空の下、遙か未来の時代に在る彼女のことを。

会いたいと思う。だがそれと同じくらいの強さで思うのだ。離れたくない。

自分がこの時代に居ていい人間ではないことは分かっている。いずれにしても大神は近い未来、今のマリアの前から消えることになるだろう。たとえこのまま、元の時代へ帰れなかったとしても。自分と言う異分子の存在は、確実にこれから先の未来へ悪い影響を落とすことになる。それだけは、あってはならないことだった。

だから――

大神は手を伸ばし、その花を手取る。ほころびかけた蕾に触れ、顔を上げると、

『この花を、いただけますか？』

店の奥に声をかけた。すると、中からこの店の主らしい小さなおばあさんが出てきて、ニコニコ笑いながら頷くと、

『いい人への贈り物かい？』

そんな風に言った。

大神はそれを言葉で肯定するでもなく、頷いてみせるわけでもなく、ただ静かに微笑んだ。

おばあさんは、そうかい、そうかいと頷いて、大神の手からその花を受け取ると、丁寧に、だが素早く包んで渡してくれた。見る

と淡い色合いの、可愛いピンクのリボンが優しく揺れていた。

「ありがとうーお金を差し出しながら言うと、それを受け取りながらおばあさんも答えた。

『あんとと、あんたの可愛い恋人のうえにいいことがあるように祈ってるよ』

にっこりと笑いながら。

もしかしたらそれはただの決まり文句だったのかもしれない。多分そうなのだろうと思う。でも、大神は嬉しかった。

にっこりと笑い、頭を下げる。それから身を翻して駆け出した。この花を、一刻も早くマリアに見せたくて。

彼女は喜んでくれるだろうか？微笑ってくれるだろうかー？

ただ一輪の花を大事そうに胸に抱え、大神は走る。心にあるのは一人の少女だ。過去と未来ー二つの面影を持つ、ただ一人の女性。

マリアー

心の中で彼女を呼ぶ。

ーマリア、君に会いたい。君に…

切なくて、苦しくて…だが甘美なこの想いを、人はきつと恋と呼ぶのだろう。

かつて大神は恋をした。この上も無く幸せで、だがそれと同じくらいに切なく、狂おしい恋を。

マリアが好きだ。強く、そう思う。彼女を思うことは幸せで、だがやはりどこか苦しい。辛いとは思わないけれど、胸が痛くてどうしようもないこともある。甘くて、切ない、それは、きつと恋の痛みだ。

遠くに、古ぼけた二階建ての建物。マリアの、いる場所。

少し乱れはじめた呼吸を整えながら、大神はさらに足を速める。だんだんと近付いてくる建物。そこは今の大神にとって、唯一帰るべき場所だった。

第8章 3

第8章 3

キッチンから聞こえる物音に眠りの底から意識が浮上する。

ゆっくりと目を開け、音のする方に目を向けた。そこにはたいして広くもない空間を所狭しと動き回る黒髪の青年の姿。

出会ってからまだ、ほんの数日しか経っていない。それなのにそんな彼の姿は、まるで最初からこの部屋の住人であったかのように、まるで違和感なくなじんで見えた。

まだ寝ぼけたままの瞳で彼の背中を追いかける。目が覚めきっていないせいなのか、頭の中に薄い幕がかかっているかのようになんだかぼーつとしてはつきり物事が考えられない。彼の背を目で追いながら、こつちを振り向いてくれないだろうかー普段なら絶対に考えないようなことを思ってしまう。振り向いて、私を見て、こつちが知られて幸せになってしまうような、あの笑顔を見せてほしい。

バカみたいだー天井を見上げ、小さく苦笑い。だんだんと目が覚めて来た。しかし、それでもまだ、体の芯が痺れたように熱っぽい眠い訳ではないけれど、なんだかベッドから離れがたくて、マリアはもう一度目を閉じた。

そうしてそのまま、しばらく耳を澄ませていると、近付いてくる足音が聞こえた。起こさないように、静かに静かにーその優しい気配は彼のものだ。

「マリア？」

様子を窺うように彼の声。

「食事の準備、出来たよ。まだ、寝てるのかい？」

顔の上に影が落ち、彼がこちらを覗き込んでいるのが分かった。

ちつとも眠くないのに、なぜか重い瞼を開けると、飛び込んで来たのは少し心配そうな彼の顔。そんな彼を安心させるように、マリアは唇を少し微笑ませ、ゆっくりと体を起こした。

「大丈夫。起きてる」

短く答えて立ち上がる。一瞬感じた目眩を無視してキッチンへ向かう。そこに用意されていた朝食は以外にすっかりしたもので、マリアは少し驚いたように目を見張った。

「どうだい。結構ちゃんとしたのが出来てるだろ？」

「料理、得意なのね」

そう言うと、大神は少し照れた顔をして、

「そうだね。胸を張って得意ですって言える程じゃないけど、料理をするのは結構好きなんだ」

食べてみて？ー大神の言葉に促されるように、マリアはふんわりと焼けているオムレツを口に運んだ。

「…おいしい」

思わず口をついて出たそんな言葉に、大神が笑う。心から嬉しそうに。

「良かったあ」

そう、言いながら。

その、笑顔に目が奪われる。あまりに素直に自分の目が大神の姿を追うことに、マリアは軽い驚きを覚えていた。

今日の私はやはりなんだかおかしいーマリアは思う。思いはするものの、何故か思考回路が麻痺していて、うまく考えがまとまらない。なぜ？とか、どうして？とか、そういうことを考えるのが億劫だった。

そんな風にぼーっとまとまらない考え事をしていたせいか、不意に目の前に差し出されたそれがなんなのか、一瞬理解できずに瞬きを二回。

花、だった。よく見れば一目瞭然である。真っ白なー何の花なのか、名前は出てこなかったけれど、綺麗な花だと思った。

ただ、それが何故自分に向かつて差し出されているのかが分からない。その理由を自分で考えるのが面倒だった。だから、答えを求め様に、それを持つ青年の顔を見る。

彼は真つ赤な顔をして、それでも真つ直ぐにマリヤを見ていた。

「花屋で見つけたんだ」

それはそうだろう。花は、普通花屋に売っているものだ。マリヤは頷く。

「綺麗だなんて、思って」

鼻先に突き付けられたままの花を見ながら再び頷く。

「君に「マリヤに似てるって、思った」

目を見開いて、彼を見た。

「そう思ったら、無性にこの花を君に持って帰りたくなつた。俺が勝手にそう思つたんだ。いらなければ、そう言つて？」でも、もらつてくれれば嬉しい」

無意識のうちに手が伸びていた。照れくさそうに、でも嬉しそうに大神が笑う。

かつて、そんな風にマリヤを花にたとえた人が居た。その時彼が示したのは、今大神がくれた物とはまるで違う花。北の大地にひっそりと咲く、白い小さな花だった。

「お前みたいだな。思わず、守つてやりたくなる。」

そう言つて笑つた男の顔を、マリヤは今でも覚えてる。

彼は、もういない。

いくら探しても、求めても。でも――

手の中の花を見て、青年の顔を見る。

あの人とはまるで違う。髪の色も、瞳の色も、姿形も、その人種も。なのに重なる――時々、胸が苦しくなるくらいに。

怖い――と思つた。目の前に居る、優しすぎるほどに優しい青年が。何かが変わつてしまふそう。何もかもが、崩れ去つてしまふそうで――怖かつた。けれど、その一方で、それを望む自分も居る。

拒む心と求める心――二つの矛盾する思いが互いの存在を主張しあ

っていた。

目を、閉じる。真白の花を胸に抱く様にしながら。

「マリア？」

気づかうような青年の声―

その声を聞きながら、マリアは、自分はこれからどうなってしまうのだろつか、と、ただそのことだけを考えていた。

第8章〜4〜

第8章〜4〜

その夜のマリアはどこか様子がおかしかった。いつもの様に、酒場の隅のテーブルで店の中を見ているが、その瞳にいつもの覇気は感じられない。

大神は、彼女のことを心配で仕方が無かった。

具合が悪いなら休んだ方がいいと言ったのに、彼女は聞く耳を持たない。大丈夫の一点張りだ。

マリアの意地っ張りー給仕をしながら、視界の隅にいつも彼女の姿を映している。彼女はぼーっとどこか一点を見つめたまま、何か考え事をしているようだった。

ーやっぱり、今日は少し早くあがらせてもらえる様にマスターに頼んでみよう

そう思っつて、カウンターの方へきびすを返した瞬間、その声は聞こえた。

『よう、お嬢ちゃん。今日はやけにしおらしいじゃねえか』

濁った響きのだみ声は、明らかに酔っついていて、マリアに対する悪意をはつきりと感じさせている。反射的に大神は振り向いていた。

大きな体の男だった。重量はあるが太った感じは無い。彼は、軽い足取りでマリアの前に立つ。彼女を見下ろす男の目の奥に、強い負の感情を見たと思ったのは、決して大神の気のせいでは無いだろう。

マリアはけだるそうに顔を上げ、その男を見上げた。不快そうに細められる翡翠の瞳。『どいて』

氷の様に冷たい声がそう告げた。

だが、彼女の目の前に立つ男は平気な顔だ。ニヤニヤと薄ら笑い

を浮かべたまま、変わらず彼女を見下ろしている。

『そう冷たくするなよ、ベイビー。たまには楽しく飲もうぜ。せっかくのきれいな顔が台無しじゃねえか』

にやけた顔を彼女に近付け男が言った。

『お前と慣れあう気はない。早くどこかへ行きなさい。まだ、警告ですむうちに』

睨み付けるようなその眼差しさえ受け流して、大きな手が彼女の手首をつかむ。

まずいなー大神は思う。

いつもの彼女なら大丈夫だろう。あんな男一人、どうとでもあしらえるに違いない。しかし今の彼女は――

必要ないって言われるかもしれないーでも……

心を決め、彼女の元へ行こうとした時、その肩をつかんで引き止める者が居た。

『待てよ、一郎。あの男はちょっとヤバいぜ』

驚いて振り向く。そこに居たのはあの陽気なアメリカ人のボードウィル。彼は妙に真剣な顔をして大神を見ていた。

『ヤバい？なら、よけいにマリアを一人にしておけないよ』

彼の手を振り切り、彼女の側に駆け付けようとした大神の肩を、ボードウィルはさらに強く引き戻す。

『待てつて。本当にあいつはヤバいんだ。マリアだけなら平気さ。女には結構甘いやつだからな。だが、お前は駄目だ。男にやマジで容赦ないんだ。しかも執念深い。殺られちまうぜ、お前』

彼は、本当に大神のことを心配してくれているようだった。大神はマジマジとボードウィルを見る。そしてにこりと笑った。

『ありがとう』

それに吃驚した様に、男が目を剥く様子がおかしかった。大神は微笑んだまま、肩にかかった男の手をそつと外した。

『心配してくれて、ありがとう。でも、俺は平気だよ。自分の身くらい、自分で守れるさ。それとも、俺はそんなに弱そうに見える

のかな』

そう見えるから忠告してんじゃねえかーその言葉がボードウィルの口をついて出るよりも前に、大神は駆け出していた。誰よりも大切な少女の側に行くために。

ボードウィルは、あきれた様にその背を見送り、盛大なため息をつく。

『バツカヤロウ……』

決して小さくはない声での罵倒。しかしそんな彼の声も、今の大神の耳には届かないー

第8章 5

第8章 5

いい加減に、この目の前の男をどうにかしなければと思っていた。今までも、この酒場で何度か見たことのある男。いつもどこか遠くの席から、粘つくような視線をマリアに向けていた。

どうにかしないとーマリアは思う。だが、目にも、声にも、つかまれたままの腕にも…まるで思う様に力が入らない。体が鉛の様に重かった。

ほんの一瞬、マリアは目を閉じ、微かな吐息を漏らす。それはいつもの彼女なら決して考えられない行為だった。

だが、その瞬間ー手首に感じていた圧迫感が消えた。驚いて、目を開ける。

そこに、一郎が居た。

険しい顔をして、目の前の男を睨んでいる。その手は、男の手首をつかんで容赦なくひねり上げ、さつきまで余裕一杯に笑み崩れていた男の顔が、今度は苦痛に歪んでいた。

『少し、ふざけ過ぎだ。外で、酔いを醒まして来たらどうだい？いつもと変わらない柔らかな口調の中に、隠しきれない怒気を感じる。』

彼は怒っているようだった。静かにーだが明らかな激しさで。それはマリアが初めて見る彼の一面だった。

『てめえ…！』

荒れくれ男の口から、獣のような唸り声もれる。

だが、それすらも何の威嚇にもならない。大神は平然とした顔で真つ赤な顔の男を見返している。

『おいおい、何遊んでんだよ、大将！』

『そんなひよろひよろした若造、さつさとのしちまえ!!』
そんな周囲のヤジにも、男は唸り声で答える事しか出来なかつた。
言われて出来る者ならさつさとやっていいる。それが出来ないから
こうしてぶざまな姿をさらしているのだ。

さつきから何度もつかまれたままの腕を自由にしようとして試みるの
だが、青年はびくともしない。

そのすました横面に握った拳を叩き付けようとしたが、それすら
も青年の手に止められてしまう。

男は、歯ぎしりをして大神を睨んだ。

大神は静かに、彼を見返す。その真つ直ぐに澄んだ眼差しに気圧
された様に、男が一步、後ろに足を引いた。

それを見逃さずに大神は再び男に警告を与える。

『今日はもう帰って欲しい。聞き分けてくれないか？手荒なまね
は、したくない…』

そう言つて大神は、男を見る目をまるで威嚇する様に細めた。
しばらくの間、そうして二人は睨み合い―先に根負けしたのは案
の定大神に手をつかまれたままの男だった。

忌々しそうな舌打ちを漏らし、大神の手を振払う。

『覚えてやがれ』

そんな、三下の小悪党がよく使いそうな常套文句を捨て台詞に、
その男は足音も荒く薄暗いバーの扉の向こうへと消えた。

大神はホツと息をつく。そうしてやっと、マリアの方を振り向い
た。

ひどい、顔色だった。薄暗い店の照明の下でもはつきり分かるく
らいに。

『よけいなことを…』

かすれた声で文句を言う彼女を無視して、大神は手を伸ばし、そ
の額に触れる。

眉をひそめ、厳しい顔でマリアを見た。

『熱がある』

家に連れて帰らないとー大神はカウンターの向こうのマスターに目で問いかける。彼も彼女の様子には気が付いていたのだろう。小さな頷きで了解の意を大神に伝えた。

ほっとした様に微笑み、大神はマリアの方に向き直る。見ると押し当てられた大神の手もそのままに、マリアはぐったりと目を閉じている。

『マリア…？』

名前を呼ぶが、返事は無い。

大神はそれ以上無駄な時間を費やすこと無く、彼女のコートでその体を包み、そっと抱き上げる。

彼女が少しでも辛くない様に、苦しくない様にー大事に大事に抱きしめた。

第8章〜6〜

第8章〜6〜

真剣な瞳が、少し怒った様にマリアを見つめていた。

彼の腕が伸ばされ、大きな掌が額に触れる。

やめる、と、その手を振払おうと思った。だが、その意に反して
瞼が重くなる。彼の掌はひんやりと冷たく、とても気持ち良かった。

目を、閉じる。

そうしてしまうと、なんだかもう一度目を開けるのが億劫になっ
た。

『マリア…?』

不安そうに彼の声。

大丈夫と、そう伝えたいのに声にならない。意識が、途切れる。

最後に残った記憶は、優しくそっとまわされた彼の腕の感触―た
だ、それだけ

目が覚めた時、マリアは暗闇の中でただ一人横になっていた。

ぼんやりと、暗い天井を見上げ、耳を澄ませてみる。

物音一つ聞こえない静寂。

彼は―一郎はどうやら、どこかに出かけているようだった。

と、その時。外へとつながるドアの向こうで何か物音がした。

彼が帰って来たのかと思った。

ベッドの上に半身を起こし、ドアの向こうに呼びかける。

『一郎?』

その瞬間、大して頑丈に出来ていない木製のドアが乱暴に蹴り開
けられた。

『はずれだよ、お嬢ちゃん。残念だったな』
その向こうから現われた大きな体の男がにいつと笑う。最悪の、
相手だった。

両腕に荷物を抱え、大神は走っていた。薬やら、食料品やらを買
い込んだ帰りだ。

あのショッピングモールには一晩中店を開けているところも少
くはない。それは昼間のうちに確認してあった。

マリアを連れ帰った後、大神は急いで買い出しに出っていたのだ。
彼女の部屋には薬も、食料だって余分には買い置いてなかったから。
見るともう東の空がつつすらと白みはじめている。後少しで夜が
明けるのだろう。

マリアはまだ眠っているだろうか。それとも目を覚まし、もしか
したら大神の不在を不安に思っているのではないか？

早く、早く！

大神の心は妙な焦燥感にかられていた。嫌な予感がした。何故だ
かとても！

走って、走って…そうしてやっと、見なれた建物の前に着く。

休む間もなく階段を駆け上がり、大神は愕然とした。

マリアの部屋のドアが大きく開け放たれていた。

体中の血液が一瞬にして凍り付いた気がした。

部屋に駆け込んだ大神の目に映ったのは、悪夢のような現実！

そこにマリアの姿は無い。

あるのはただ、乱れた寝台と、踏み荒らされた部屋の惨状。

大神は駆け出した。こんな時、助けてくれる相手を、今の大神は
一人しか知らない！

第8章 7

第8章 7

バーのドアが、性急に、荒々しく叩かれるのを、ボードウィルは半ば眠りの中で聞いていた。

カウンターの向こうでマスターが動く気配。ドアの方へ向かう足音が聞こえる。

鍵を開ける音。

鈍い音をたてて、ドアが開く。

『ボードウィルは!?!』

名前を呼ばれ、一気に眠気が覚める。その声は彼の知っている声だった。

顔を上げ、ドアの方を見る。

『一郎か?』

名前を呼ぶと、彼はほぼ中央のテーブルに居るボードウィルを見つけて駆け寄って来た。

『良かった。探したんだ』

彼は、心から安堵した様に言った。そして、真剣なまなざしでボードウィルを見つめ、

『頼む。助けてほしいー君しか、頼れる人がいないんだ』

そう、言った。

『…何が、あった?』

『…っ、マリアがー』

『あいつだー』

大神の話聞いた後、彼はうめく様にそう言った。

『そんな無茶なことするやつ、俺の知ってる限りじゃあいつしか

いねえ』

『誰なんだ？』

『あいつさ。昨日の晩、マリアに絡んでたあの野郎だ』

ほんの一瞬、目を閉じる。聞くまでもなく、分かっていた気がした。マリアが攫われたと分かった瞬間、大神の脳裏に浮かんだのは昨夜の男の憎悪に満ちた顔だった。

『奴はもともと、マリアに執着してた。普段のマリアなら遅れをとるような男じゃないが。今はー』

『…どこだ？』

『ん？』

『どこに行けばマリアを助けられる？』

尋ねられ、ボードウィルは苦虫を嚙潰したような顔をする。

『あー、そりゃあ俺もあいつのアジトのいくつかは知ってるさ。』

だが、そのどこにマリアが連れ込まれたかは…』

歯切れ悪く言う彼の言葉を遮る様に、もう一つの声が響いた。

『港の廃工場だ』

驚いた様に大神が声の主を見る。

『新しい女を手に入れた時、奴はほぼ間違いないそこに連れ込む』
そう言つて、無口な老店主は大神を見返した。

『マスター』

『いいのかよ？お得意さまだろ、あんな奴でも一応は』

からかう様にボードウィル。それに、マスターはにやりと笑つて返し、

『いいさ。あの娘が居てくれないと、うちの店も困るんでな』

そんな彼の言葉に、大神は不意に目頭が熱くなる。

『ありがとうございますー』

深々と頭を下げた。

マリアはきつと気付いていない。

どんなに拒絶し、冷たく他人を遠ざけようとしてもーそれでもちやんと彼女を見つめ、大切に思ってくれる人は居るのだ。

彼女に伝えてあげたい。閉ざしていた目をほんの少し開いてみれば、世界はこんなにも優しく、彼女を包み込んでいてくれるのだと言うことを。

だが、そのためには――

大神は顔を上げ、真っ直ぐにマスターを見た。

その目に、大神の決意を見たのだろう。彼は頷き、言った。

『早く行ってやれ。お前なら、助けられるさ。俺の目は、こう見えて、意外に確かなんだぜ？』

強く、頷く。

助けなければ、彼女を。誰よりも愛おしい存在を。いつかまた、ここじゃないどこかで、再び彼女と出会うためにも――

もう一度頭を下げ、大神は駆け出す。もう、後ろは振り向かない。

『お、おい！待てよ！！俺も行く！お前一人じゃ無理だぜ』

その背を、バタバタとボードウィルが追いかけていく。

男達の目的は一つだ。大切な少女を、取り戻す事――ただ、その事のみ。

『おい、これを貸してやる。持ってる』

そう言っただけで差し出された銃を見て首を振る。

『ありがとう。でも、それは君が使ってくれ、ボードウィル』

『お前はどっするんだ？武器なしで乗り込む気じゃないだろうな！？』

まさか――大神は笑う。いぶかしげなボードウィルの前で、辺りを見回し、手ごろなサイズの鉄パイプを手にとった。

手に握るにちょうどいい太さの、真っ直ぐな棒に、同じくその辺りにあったぼろ布を巻き付け、握りやすくする。

『うん、これでいい』

二、三度軽く振って、それを腰のベルトにさした。そんな彼を見て、ボードウィルが呆れたような声を上げる。

『まるでサムライだな』

『そうだよ。侍さ、俺は』

ボードウイルの言葉に答えて笑った。

そう、侍の様に己の信念をかけ、守るべき者のために戦うのだ。

その、命さえかけてー

『行こう。彼女が待ってるー』

大神が見る先にあるのは、もう使われていない、古い工場。そこに、囚われの少女が居るはずだった。

第8章〜8〜

第8章〜8〜

ここで終わるのだろうかー

薄汚れた床に転がったまま、マリアはぼんやりとそんな事を思っていた。

手足に戒めは無い。だが今の彼女には、立ち上がって逃げるだけの体力すら残っていなかった。出来る事は、与えられた薄い毛布にくるまって寒さに震えている事だけ。そして、いずれ訪れるだろう自らの死を見つめている。

自分は、いずれ死ぬのだろう。あの男になぶり殺しにされるのか、あるいはこのまま放っておかれてもおそらくは緩慢な死が訪れる。助けは、無いー

脳裏に浮かぶのは、一人の青年の顔だ。優しく、どこまでもまっすぐなー。きっと彼は今頃必死になって探しているだろう。

だが、ここには辿り着けない。彼に、ここが分かる訳は無いのだ。だから、助けは無い。待つだけ無駄ーなのに…

『待つている…？私は、彼をー』
かすれきつた声で、呟く様に。

来る訳無い…来る訳無いのに、でもー
心から彼の姿が消える事は無い。いつの間に彼は、自分の中でこんなにも大きな存在になっていたのかー
彼を想うーそれだけで、心が暖かい。

もう一度会いたいと思つた。彼の顔を見て、その声を聞いてーそうすれば、自分のこの不安定な気持ちもハッキリするに違いないと。だけど、体が動かないのだ。逃げ出すだけの力など、どこを探しても残っていない。

終わりなのだ。もう時期、全てが終わってしまっ

『おい』

濁っただみ声に、マリアはうつすらと目を開けた。

目の前の椅子に座った男はニヤニヤ笑いながらマリアの顔を覗き込んでいる。

『まだ、死ぬんじゃねえぞ？もう時期、お前の愛しい男が助けに来てくれるさ。なぶり殺しにされると、分かっているが』

男の言葉に、マリア目を見開いた。信じられない事を聞いた様に、そして、彼を睨んだ。

『彼が、来るわけない。待つだけ無駄だ。さっさと、私を殺せばいい』

『来るさ。心底惚れた女のためだ。どんな手を使ってでもここまて来る。俺に殺されるためにな。だから、それまで死んでくれるなよ？お嬢ちゃんが死んじまったら楽しみが半減だ』

『来ないわ…来る訳、ない』

『あいつの見てる前であんたを犯し、あんたの目の前であいつをなぶり殺しにする。あんたも、あいつも、どんな顔をするのかーこれ以上の娯楽は無いぜ』

声を上げて男が笑った。

虚ろな表情のまま、マリアはぼんやりと前を見ている。そんな事になる訳は無い。彼はここに来ないのだから。

自分はここで死に、彼はじきに彼女を探す事を諦め、どこか、自分の故郷へ帰っていくのだ。

もう、考える事さえ辛かった。眠ってしまいたい。このまま、ずっと、永遠にー

第8章 9

第8章 9

不意に、銃声が響いた。遠くの方で。

閉じかけた目を見開く。男を見上げた。彼の顔に浮かぶのは、凶暴な歓喜。探し求めた獲物を見付けた肉食獣の様に、彼はその喜びを隠す事無く――

『来たぜ？あんたの騎士のお出ました』

『まさかー』

かすれた声がひび割れた唇から漏れる。

まさか、と言いながら、心はもう確信している。彼が、来てくれたと言う事を――

『マリア!!』

その声が響いた。

待ち望んでいた声だ。来るはず無いと思いながら、それでも待つていた――

顔を上げて、声の方を見た。

そこに、彼が居た。

黒曜石の瞳がマリアを認め、ほっとした様に細められる。

彼のそんな表情を目にした途端、不意に涙があふれた。何故だか分からない。ただ、胸が熱かった。

マリアの無事を確かめた彼は真っ直ぐな眼差しを、彼女の傍らに立つ男へと向けた。

『どんな魔法を使ったのか知らねえが、よく一人でここまで来たな。ま、無傷とまでは行かなかったようだが』

言いながら、男は唇の端を笑いの形に歪める。その言葉に、ハッとして再び青年の姿へ目を向けた。脇腹の辺りが裂けて白いシャツ

を赤い血が鮮やかに染めあげている。

『マリアを、返してくれ』

『…返してやるさ』

ゆっくりと男が銃を構えた。大神は動かない。ただ静かな眼差しで男を見ていた。

『この俺様に勝てたらな』

大神は無言のまま、持っていた鉄パイプを構えた。それを見た男が笑う。大神の無謀さをあざ笑うかの様に。

『お前の獲物はその棒切れか？それで俺に勝てるんでも？』

『…勝つさ』

答えた彼の目が、ほんの一瞬マリアを見た。その瞳が、柔らかく微笑む。大丈夫だよと。マリアを、安心させる様に。

そして、戦いが始まる。

『ま、お前がそれでいいなら、俺は構わねえがよ』

言うが早いか、男の拳銃が火を噴いた。瞬間、大神の腕が動く。構えた鉄パイプをわずかに動かし、飛んで来た銃弾を弾いた。そしてそのまま、男の驚いた顔を見もせずに地を駆ける。

予想外の事に動揺した男は、大して狙いも定めずに二発目、三発目と銃弾を放ってくる。それら全てを退け、大神は男の目前へと迫った。

鉄パイプを一閃させて、男の持つ銃を弾く。そして返す刀で容赦なくその巨体を打ち据えた。

ただの一撃だった。まるで容赦のない打撃に、男は地に倒れ伏す。そしてそのまま、彼は起き上がっては来なかった。

大神は目を閉じ、大きく息を吐き出す。己の勝利を神に感謝した。一歩間違えば、こうして地に沈んでいたのは自分であったのかもしれないのだから。

ゆっくりと目を開け、マリアを見る。毛布にくるまったまま、彼女は熱に潤んだ瞳で大神を見上げていた。

愛しいー誰よりも大切な少女。

大神は手を伸ばし、彼女の体をそつと抱き上げる。熱のある体は熱く火照って、その命を大神に伝えてくれた。

良かったー大神は思う。負けなくて良かったーと。彼女をこの手に取り戻す事が出来て、本当に。

『あなたは、馬鹿だ…』

かすれた、微かな声が耳をうつ。腕の中の、少女の体が震えていた。

『ーそうだね』

そう返して、大神はただ笑った。

『いいんだ、馬鹿で。そうじゃなかったら、君をこうして再び、腕の中に取り戻す事は出来なかったー』

だから、いいんだよーと大神は笑う。晴れ晴れと。

そして歩き出した。扉の向こうーおそらく疲れきった友が、待ちくたびれているだろう、その場所へー

第8章〜10〜

第8章〜10〜

薄暗いその部屋に、少女の静かな寝息だけがただ響いていた。

『良く、寝てるみてえだな』

良かったーとボードウィルが呟く様に言った。それに大神は頷きで返し、静かに笑う。

もうじき朝が来るのだらう。カーテン越しの空がだんだんと明るくなっていくのが分かる。

男と男は静かに向かい合ったまま、朝が来るのを待っていた。

『ーもう朝だ。そろそろ俺は帰るぜ？』

『ああ…』

頷き、立ち上がる男を見上げる。

じゃあなーそう言って、立ち去ろうとした男の背中に大神は意を決した様に呼びかけた。

『待つてくれ』

不思議そうな顔で振り向くボードウィル。その顔をじっと真剣なまなざしで見つめ、

『頼みたい事が、あるんだー』

そう、切り出した。一瞬、怪訝そうな顔をしたものの、彼はすぐにいつもの表情をうかべ、

『…ま、俺で間に合う事なら、頼まれてやってもいいぜ？』

そう、頷いた。

ありがとー大神は目を、閉じる。

朝が近い。もうすぐ夜明けだ。新しい一日がまたやってくる。残された時間は、きつと後わずかー

目を開け、目の前に立つ友人を見た。普通に生活していたなら、

決して出会う事も無かつただろう。

彼が好きだった。優しく、曲がった事が嫌いでお人好しー何より、マリアの事を大事に思っていてくれる。彼ならきつとー

『マリアを、頼むよー』

万感の想いを込めて、微笑んだ。ボードウィルが、信じられない事を聞いた様に見開く。

『何、言つてんだよ！？お前：お前はマリアが好きなんだろ？』

『ああ…とてもね』

『なら、なんで！？好きな女だろう？お前が捕まえとけよ！他の男に頼むなんて言つな。お前がその手で、守つてやればいいじゃねえか！！』

『…そうだな』

そう出来ればいい。けれどー

『聞いてくれ、ボードウィル。そして信じてほしい。俺はもうここには居られない。もうすぐ、この時代から居なくなるんだー』

そして大神は全ての事情を語つた。ここに到るまでの、全ての事をー

いつの間にか部屋はすっかり明るく、朝日の中に照らし出されていた。

大神は眠る事無く、ただ一心に見つめている。ベッドに頬を押し当て、黒い瞳で真つ直ぐに。

マリアをー。誰よりも愛おしいたった一人の少女をー

もうすぐ彼女とは別れなくてはならないのかもしれない。けれど不思議と心は穏やかだった。

ボードウィルは、あの愛すべき友は、確かに約束してくれた。自分出来る限りの事はしようと。大神の目を見て、大神の手を取つてー

たとえ大神が頼まなくても、彼はきつとマリアを見守っていてくれたに違いない。そんな事、分かつてはいたけれどー彼の力強い誓

いは、大神の心に深い安堵をもたらした。

自分がたとえいなくなっても、マリアの側には彼が居てくれる。マリア一人の力ではどうにもならない事態に陥った時、そんな時はきつと彼が助けてくれるだろう。だから―

「大丈夫だよ、マリア―」

何も心配はいらない。たとえ俺が、君の前からいなくなっても―

「…何が大丈夫なの？」

不意に聞こえた彼女の声に、驚いて目を見開いた。そんな大神を翡翠の瞳が正面から真っ直ぐに見つめている。何もかもを見透かす様な澄んだ輝きを宿して―。

ほんの一瞬息をのみ、それからほころぶ様に笑う。手を伸ばし彼女の頬に触れた。その掌に昨日のような熱さは感じられない。どうやら、なんとか熱は引いたようだった。

「良かった。熱は下がったみたいだ」

「―答えになつてないわよ。一体何が…」

少しいらついたような彼女の声。その言葉を遮る様に、

「何でもないんだ」

大神は微笑む。

「何でもないんだよ、マリア―。君が元気になつて嬉しい。本当に」

怪訝そうなマリアの顔。

―そう、何でも無い。君は知らなくていいんだ。

そんな彼女を見つめながら大神は思う。

突然現れた異邦人は、消える時ただ静かに―俺はここにはいないはずの人間だから…だから、それでいい。

それで、いいんだ―

第8章 111

第8章 111

少し、買い物に出ないか？

日が昇り、十分に暖かくなった昼時、突然黒髪の青年はそんな事を言い出した。

体の調子ももう悪くもなく、否と言う理由も特には見いだせなかったマリアは、頷き、彼の後に着いて部屋を出た。

柔らかな日差しの中、彼は病み上がりのマリアを気づかう様に、ゆっくり、ゆっくり歩く。その斜め後ろを同じ速度で歩きながら、マリアは揺れる大神の大きな手を見ていた。不意に手を伸ばし、彼の手に触れてみる。何を考えて、と言う訳ではない。ただ、何となく。何故、と問われると、答えに困ってしまうけれども……

驚いた様に、青年の瞳がマリアを見る。綺麗な目だと思う。夜の闇よりも深い黒―まるで黒曜石のような―。

その瞳をふわりと細め、彼が笑う。その、笑顔が好きだ。今は素直にそう思える。

彼の手が伸びてそっとマリアの手を包み込む。ドキリとするが、決して嫌ではない。

穏やかな午後。触れあう指先から伝わるぬくもりが、ただ嬉しかった。

「マリア……」

不意に名を呼ばれ、マリアは大神を見上げた。

「俺はいつか、君の前からいなくなるかもしれない」

彼の唇が言葉を紡ぎ、どこまでもまっすぐで真摯な眼差しがマリアを見つめる。

「けど、もしそうだったとしても―覚えていて。俺は必ず、いつ

か再び君と出会うから」

何の根拠も、確かな証もない言葉。でもマリアは彼の言葉に嘘は無いと信じた。

だから頷く。素直な瞳で、大神を見上げながら。

彼が嬉しそうに笑う。そして、ゆっくりと空を仰いだ。良く晴れた、澄んだ青空を。

そこにある物を見つけた彼は、小さな歓声を上げた。

「見てごらん、マリア。ほらー」

その声の促すままに、マリアは空を見上げる。

目に染みるような青。そこにはー

「ー飛行機雲だ。あんなにはつきり……」

彼の、声。

少しはしゃいだような、子供の様に無邪気な響きのーその声が不自然に途切れた。

隣を見た。

そこにはもう誰もいない。さっきまで居たはずの青年の姿は影も形もなくなっていた。

立ち止まったまま、マリアは静かに目を閉じる。そして彼の手と繋がっていたはずの掌をそっと握った。

そこにはまだ、彼のぬくもりが確かに残っていて、彼はー一郎と言う不思議な青年は確かにそこに居たのだと言う事をマリアに信じさせてくれた。

目を開け、翡翠の瞳で再び空を仰ぐ。

いつか再びー彼はそう言った。それがいつになるのかは分からないけれども、彼の言葉に嘘は無かったと、そう信じられるからー。

マリアは微笑む。

悲しいくらいに澄んだ青ーその中心を走るのは、さっき二人で見上げたままの飛行機雲。

鮮やかなまでに潔く、真っ直ぐーそう、それはまるで、彼の揺るぎない眼差しの様に。

終章

終章

閉じたままの瞼の上から、太陽の光とはまた違う、人工の光が降り注いでいた。

目を閉じていてもなお眩しいその光に、大神は知らず知らずのうちに眉根にしわを寄せる。

重たい瞼をこじ開ける様に開いて瞬きを二つ。

そうして少しだけ明るさに慣れた目に映ったのは、しみ一つない真っ白な天井。それをぼんやりと見上げながら、大神は心の中で首を傾げた。

ここはどこだろう、と。

目を通して入ってくる情報にまるで思考が追い付かない。

ついさっきまで、空を見上げていたはずなのにーそんな事を思う。誰よりも愛おしい少女と一緒に、澄んだ青を横切る飛行機雲を見ていた。それなのに何故自分は今、こんな所で横になっているのだろうか？

ー本当は、分かっている。

戻って来たのだ。己が居るべき世界へと。過去の世界へ、彼女を置き去りにして。

目を、閉じる。こんなにも突然に彼女の前から消えてしまった事実を思うと、ただ、心が痛かった。

どのくらいそうしていただろう。目を閉じているうちに、どうやらいつの間にかまた眠ってしまったようだった。

けだるい眠気をまわりつかせたまま、大神はぼんやりと目を開けた。

瞬きをし、それから不意に、己の右手が暖かく包み込まれている事に気付く。驚いて、顔をそちらに向けると、そこには彼女が居た。柔らかな金の髪の毛、誰よりも愛しい人。その人は祈る様に大神の右手を抱いたまま、静かな寝息を立てていた。

「マリア」

その名前を口にするだけで心が震える。

そして思うのだ。自分がどれだけ彼女の事を好きなのかと言う事を。

身じろぎをして、彼女が目を開ける。

翡翠の美しい瞳が、真っ直ぐに大神の顔を映した。驚いた様に見開かれた瞳が、ゆっくりと細められて、彼女は心から嬉しそうに、安堵した様に笑った。

「隊長……」

「ごめん……なんだかまた君に心配をかけたみたいだ」

不思議なくらいかすれた声で返して、触れあった手にそっと力を込めた。

「本当です。心配しました。とても……私も、みんなも」

「うん……ごめん」

目を、閉じる。それからマリアの事を思った。過去の、そして現在の。

「隊長？大丈夫ですか？どこか、痛みますか？」

不安そうな彼女の声。

隊長、と、彼女の声で呼ばれるのはずいぶん久しぶりのような気がする。妙にくすぐったい。

「ー参ったな」

大神は困った様に笑った。

「どうしたんですか？」

どこまでも真剣に、それから少し心配そうに彼女が問いかける。そんな彼女を、大神は愛しそうに見つめた。

前よりもずっと、彼女の事が好きだった。彼女が大切に、愛おし

くて、どうにかなってしまふんじゃないかと思う位に。

溢れんばかりの狂おしい思いーけれど、口に出せないまま、思いを込めてマリアの目を真っ直ぐに見る。

翡翠の瞳は今も昔も、変わらぬ美しい輝きをたたえている。ただその輝きは流れた年月彼女が得た様々な経験の分だけ深く、柔らかで暖かい。

「いや、なんでもないんだ」

大神は緩やかに首を振った。

マリアもあえてそれ以上の追求はせずに、そうですかーと微笑んで立ち上がる。

「マリア？」

見上げた大神に、

「みんなに知らせてきます。隊長が目を覚ましたって。とても心配していましたから」

答えるマリア。

そのまま離れていこうとした彼女の手をそっと握って引き止め、

「もう少しだけー」

小さな声で。

まだ、君が好きだと伝えるだけの勇氣はない。だけど今はただ、彼女に側に居てほしいと思うから。今ある精いっぱいの勇氣で伝える。

「もう少しだけ、このままー。君と、二人で居たいんだ。駄目かい？」

「た、隊長……」

少しうろたえたようなマリアの声。柔らかな頬に朱が昇り、戸惑いを含んだ眼差しが大神を見つめる。照れくさくて仕方が無かったが、大神は目をそらさなかった。真っ直ぐに彼女の目を捕らえたまま、じつとその答えを待つ。

「……分かりました。後、少しだけー」

火照った頬をそのままに、マリアは微笑んで再びいすに腰を降ろ

した。

穏やかな昼下がりに。

大神はふと思いついた様に、マリアの名を呼んだ。

「マリアー」

「はい」

「いつになるか分からないけど…君に贈りたい花があるんだ。―
受け取って、もらえるかな…?」

「…はい」

マリアは笑ってくれた。心から、幸せそうに―

いつかきつと、君を好きだと伝えよう―

両腕いっぱい、白い花を抱えて。

君と出会えて、本当に幸せだった、そう伝えたい。

そして、いつかまた、一緒に見上げられたらいいと思う。

真っ青な空に鮮やかなコントラストを描く、一筋の飛行機雲を―

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301e/>

花の名前

2011年11月19日13時12分発行